

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
令和三年十二月一日発行（毎月一回一日発行）
第二十卷 第九号（通巻二七七号）

万象

B A N S Y O

十二月号

2021. 12



十二月の句

かくれんぼ三つかぞえて冬となる

寺山修司

さまざまな文芸、芸術の分野で活躍した寺山修司。俳句に熱中した高校時代は、十冊のノートに句を残している。

彼の文学の象徴である「故郷」「父」「母」が俳句にもより一層色濃く表れている。鬼という疎外感の中で、突然感じた冬。しかも、かくれんぼの最中である。飛躍した表現の中に、叙述の具体性、物語性が、読むものを魅了する。

さて、鬼は、冬を感じた後、友だちをつかまえられただろうか。

（小川明美）

令和三年

十二月号

万象

BANSYO

人間は、
努力をする限り、
迷うものだ。

ゲーテ『ファウスト』

万 象

令和3年12月号

主宰作品 蓮根掘る・・・・・・・・・・・・・・・・内海 良太 4

副主宰作品 雁渡し・・・・・・・・・・・・・・・・小林 愛子 5

風 音 集

江見悦子・柳澤宗正・山田春生
福島せいぎ・内藤恵子

続・万象と共に⑥ 「花鳥来」 主宰深見けん二先生を偲ぶ・・・・・・・・内海 良太 8

同人作品

内海良太選・・・・・・・・・・・・・・・・9

同人作品の佳句・・・・・・・・・・・・・・・・内海 良太 31

新しい「万象」を目指して ―来年度からの人事変更について― ・・・・内海 良太 33

同人特別作品

鳥 渡る・・・・・・・・・・・・・・・・山本とく江 34

涼 新た・・・・・・・・・・・・・・・・森山 暁湖 35

俳書探訪・・・・・・・・・・・・・・・・古川 京子 36

特別作品評（十月号）・・・・・・・・・・・・・・・・中條 睦子 37

同人作品評(十月号) 大林 彬彦 38

万象ノオト「手帳」 高野翠子、北浦詩子、小板橋泰山、高野松風、木内マヤ、本多葵 40

巻頭作家(十一月号)プロフィール 宮田千恵子(福岡) 小林 愛子 43

万象作品

小林 愛子選 44

万象作品の佳句 小林 愛子 58

「万象」この一年 大木 茂 60

同人会だより 第四回中山純子記念俳句賞作品募集 同人会 62

珈琲ふれいく ①9 62

「万象」同人句会報(九月例会に替えて通信句会) 63

万象基金のご報告 66

俳句カレンダー掲載句自註 山本とく江 66

「万象」句会一覧 69

東西南北 70

蓮根掘る

内海

良

(主幸) 太

蓮根掘る泥がぬくしと言ひながら
ただ一人水漬きし稲を抱き起こす
木の実降る音と踏む音雑木山
曼珠沙華と牛が点々利根堤
芋煮して石は河原に戻しおく
橡の実落つ銀座画廊の志功展
秋灯下志功菩薩の胸あらは

雁 渡 し

小 林

愛 子

(副主宰)

蟬鳴く木いまも木椅子の向けありぬ
もう訪へぬ砂丘の墓や雁渡し
ぱちぱちと萬願寺唐辛子炒め
雁を待ちむらさき深むかりがね草
鮎をさげ友の来たれり萩日和
草稿を片して昼餉きりぎりす
挽ぎたての無花果乳の汁たらし

風音集



水の秋

江見悦子

(編集人)

富士の水引く外流し花梨の実
南瓜切る満身出刃にあづけては
溪谷の洞門たどる水の秋
草も木も風に明けたる子規忌かな
かさこそと風船葛宙を揺れ
花の種選る窓つるべ落しかな

木槿咲く

柳澤宗正

(同人会会長)

稻雀群がり騒ぐひとところ
鳴子綱先づはとんぼの舞ひ上がり
立て替へのなじめぬ生家木槿咲く
開山の岩屋の墓碑や曼殊沙華
とんばうの水に飛び込む秋暑かな
小鳥来る丘の洋館窓開く

今日の月

山田 春生

(顧問)

ながらへて長湯たのしむ鉦叩
吹き荒るる天心に月皓々と
自肅にもなれてけふより月見酒
白雲を蹴散らしてゆく今日の月
武蔵野や女郎花又男郎花
ちちろ鳴く棚いっぱいの出土土器

谷保南義寺

盆の道

福島 せいぎ

(顧問)

踊りなき街の入江に鰻泳ぐ
川施餓鬼僧のひとりは半ズボン
墓山のきれいに刈られ盆の道
山門のあらぬところに今年竹
何もなき国分尼寺跡百日紅
ロバのパン虹立つ町に見失ふ

秋深し

内藤 恵子

(顧問)

温室のほろほろ鳥へ朝日濃し
北国の崩れて迅き秋の雲
秋うらら弁天池に金の鯉
山の影離れてゆけり鯉の池
木の間より羽音をこぼす残る蟬
裸木の上野の櫟鳩集ふ



「花鳥来」主宰 深見けん二先生を偲ぶ

内 海 良 太

令和3年9月14日、深見けん二先生（99歳）が逝去された。

先生の主宰する「花鳥来」の最新号で、高齢によって終刊せざるを得ない旨のご発言に、いよいよご自適に過ごされるものと思ひ、益々のご長寿をお祈りしたばかりだった。

深見けん二先生には、平成17年秋、埼玉県川越のプリンスホテルで開かれた「万象」全国大会で、「虚子の「俳句への道」に従って」と題してのご講演をいただいた。

高浜虚子を一番よく知る深見先生の啓咳に接し、「客観写生」、「花鳥諷詠」の理解に大いに誘掖されるものがあつた。虚子のいろいろな話を紹介された中で「俳句とは花鳥諷詠であつて、客観写生というのが方法なのです」が印象的だった。

そして「虚子先生は、主観だ、客観だといつても、いい句はいいのです」と言っていたと、人間虚子の大きさを紹介されていたのを今でも覚えている。

深見けん二先生の俳友、故石井とし夫さん（「ホトトギス」同人平成23没 87歳）は、生れも育ちも印旛沼畔で私も存じ上げていた。平成2年、日本伝統俳句協会の第一回協会賞を受賞し、「沼の詩人」と称され印旛沼の自然を句に沢山遺されている。

深見先生は石井さんの遺句集「米寿まで」の序文をお書きになり、お二人は虚子門での稽古会や夏の鍛錬会も常にご一緒に研鑽を重ねてきた仲だったようだ。

共に見し沼の虹とはなられけり 深見けん二（石井さんへの弔句）

初夢はけん二とともに沼歩き 石井とし夫（亡くなる2年前）

深見先生は「私は、昭和末から平成にかけて、お住まいの印旛沼に誘われ、氏の車で二人で吟行し、沼の生活の中の季節が実感出来た」と述懐されていた。

遺句集の「米寿まで」を読んで、ことさらお二人の虚子門での友好を思い、深見けん二先生の慈愛に満ちたお人柄を偲んでいるのである。

ここに、深見けん二先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

同人作品



内海良太選

○は佳句に選ばれました。

札幌 松原智津子

古本を回収車まで合歓は実に
面会の願ひ叶はず木槿散る
葛の花大きな葉蔭に控へ目に
鮭戻る一級河川夕明り
住所録又一人消す夜半の秋

札幌 岡本敬子

実験棟より白衣の学徒まゆみの実
腐葉土へあうら深々栗の毬
藻岩嶺へ日の落ちかかる花野かな
鳶もみぢに攻め登らるる棄てサイロ
牛舎なりしマンサード屋根月昇る

札幌 濱谷和代

落日や潮引く砂洲に実はまなす
またたく間灯台岬海霧の中
牧草の丘十六夜の月明り
山の宿笹むらの蔭虫の声
牧閉ざす馬柵に激しき潮の風

札幌 大内和憲

雁の声耳聴く聞く枕上

台風に力ためをり鹿の脚
啼き声の光となりて色鳥来
くろもじにねばる御萩や秋彼岸
底紅の暮色まみれに閉ぢにけり

札幌 紅 露 恵 子

処暑なるやビーズ刺繍の半襟を
コンバイン刈田の風に日の匂ひ
単線の鉄路に朝日秋桜
爽籟や煉瓦倉庫の風響樹
並び立つサイロに日射しちちろ鳴く

札幌 大内 マ キ 子

漁火にまぎるる星の流れけり
父と子の止まぬ談義や星月夜
ジャズ演奏始まるまでの蟬しぐれ
秋の屋牧舎のどれもがらんどろ

○流木を離さぬ中州夕あきつ

笹舟の笹にもどりにて水涼し

札幌 落 合 裕 子

迎火や今夜が通夜といふ報せ
鳥除けのネットすつぽり林檎の木

中洲より瀬音に混じる虫の声
水澄むや磧伝ひに瀬泳ぐ
飛び跳ねて豊平川に鮭の群

札幌 中 鉢 弘 一

木道に谷地の匂ひや蜻蛉群る
雲の影落つる山肌もみづれり
○柏林に沿ひて河口へ秋の川
日に光り日を透かしをり薄の穂
ふるさとの過疎の山里蕎麦の花

苫小牧 林 陽 子

○蝦夷富士を背に構へし二段稲架
さりげ無く一品増やし敬老日
開け放つ窓ふんだんに虫の闇
見ゆるものみなやはらかに爽やかに
分け入りて月へ尾花を二三本

新潟 佐 藤 雄 二

路地奥にばさと捨てあり合歡の花
病室に忘れ手帳と罌粟の花
椅子ふたつテーブルひとつメロンの香
大夕焼ドーム燃えたつ鳥屋野潟

一片の雲離れざる今日の月

新湯 高橋 ひろ

空よりも雲に茜や秋夕べ

空はまだ水色のまま十日月

波音も無し月ひとつゆくばかり

口開けて待ついちじくのやはらかし

足振つて長靴を脱ぐ秋の夕

○能登寄りの佐渡の外れの碇星

南魚沼 森山 暁 湖

郭公の声澄み渡るダム湖かな

ほととぎすいまだに残る丸木橋

開拓地七十年の稲穂かな

鈴虫や青年時代の恋の径

乳牛の乳房張りつめ秋ぞ澄む

益子 光岡 れい子

白樺の根方剥がるる秋暑かな

さざ波を割り来る魚影涼新た

紅芙蓉紺屋の甕のふつつと

天高し黄金となりぬ芳賀台地

蟪蛄のクライマーとなる蕪村句碑

芳賀 大村 かし子

早稲の香の漂ふ夫の忌日かな

集中の豪雨に浸る早稲田かな

爽涼やブルーベリーのジャム煮つむ

栗御強一言足して供へけり

男体山を燃やすが如し秋夕焼

宇都宮 阿久津 勝利

歎持ちて白露の路傍婆行けり

処暑のダム展望台に慰霊の碑

林中の教会のミサ小鳥来る

濁流に幾度吞まれし下り鮎

小鳥来る佳句の出揃ふ吟行会

栃木 上岡 佳子

森の上に半円ばかり遠花火

巻ききれぬまゝにおちたる落し文

橡の実拾ふ無心となりて旧谷中

気球来ては吠えし犬亡く萩の庭

友の計報秋風鈴を外しけり

佐野 亀田 やす子

荷揚場を閉ざす鉄扉や糸とんぼ

山門に身の丈ほどの藤袴
女郎花の迷路を抜けて寺の前
欣一句碑千人草の近づきぬ
○山下る径が参道葛の花
彩雲やここは秩父よ稲穂波

佐野 増田 幸子

靡き藻に止まるおはぐろ同じ向き
五年目の月下美人の二つ咲く
川風やずずごの花穂^{かすい}うすみどり
○白檀の木目に触るる素秋かな
鮎産卵浅瀬の石に飛沫上げ

佐野 加藤 季代

見えてゐる遠くの風や稲の花
今日の月あげて昏みし三龜山
影もまた共に老いたり月天心
飛びつづけ秋の燕となりゐたり
柿高し雀の群の一波二波

佐野 鍋島 広子

赤城山の長き裾野の花野かな
天高し忠治籠りし裾野村

草紅葉友に押されて車椅子
咲き初めし木犀の風仏の間
竹垣を一枝伸びきり秋薔薇

佐野 阿部

澄

香水のほのか自転車過ぎてより
咲きさうな蒼がぼとりハイビスカス
爪ほどのすいつちよ鉢にじつとして
廻廊に色なき風や僧衣干す
日向より日陰に美しき吾亦紅

佐野 芝宮 留美子

秋草の寺めぐり来てポポーの実
匂ひ濃し少しほうけて藤袴
初もみぢ石大いなる欣一句碑
やはらかき日輪白の曼珠沙華
石灰を積む貨車長き秋茜

佐野 島田 和枝

城址への径細々とみちをしへ
精霊ばつた三段跳で草叢へ
雨あがり一夜に秋の来てをりぬ
山頂のこんなガレ場に高砂百合

雨の夜や湧き出づるごと虫時雨

佐野 茂 木 弘 子

爽涼や間伐終へし杉林
桜紅葉散るいくすぢの日矢の中
廃村の墓地の華やぎ曼珠沙華
一門を祀る山寺葛の花
初尾花僧に賜るポポーの実

佐野 亮 野

緑

帰省子の背丈鴨居にあと一寸
烏瓜の花や城址へ遠まはり
あきつ群る古墳に隣るラグビー場
エコバッグに直す洋傘虫時雨
先駆けて早稲刈る爺の誇りかな

足利 大 木

茂

落蟬を生くる姿に戻しけり
冷ややかや直角に刺す注射針
草の実や破堤のあとの護岸成る
浜茄子の館に記す津波痕
○早稲刈るや泥鰯の穴の二つ三つ

土浦 澤 照 枝

新米と古米へだてて一つ蔵
手水鉢からつぼのまま鶴来る
曼珠沙華いびつな畦のまま咲けり
稲架組みの横木短かや三段目
ジンジャーの花ぬきんでて茶屋暗む

さいたま 山 本 右 近

筆跡に残る息つぎ灯火親し
初もみぢ知足と刻すつくばひに
水切のさまに浮雲飛ぶ子規忌
小さき岩なれど磐座良夜なる
川幅を狭めて迅し下り簾

志木 中 村 千 久

落蟬に残る命の身じろぎぬ
傷秋や疫病の名に希臘文字
橡の実を掌に転がせば師の忌なる
枝豆の莢ならべをり瀬祭忌
最終稿^{「含羞の抒情」成る}届きし夜を星流る

所沢 三 好 か ほ る

高麗人^{コロナ禍}の刈つてしまへり彼岸花

薬園のなんばんギセル皆のぞき
法師蟬めぐすりの木の細枝にも
星座図をルーペもて見る夜長かな
秋気澄む一言主へ畦伝ひ

所沢 森 岡 恵 子

庭の木々ひと葉そよがず日の盛り
雉子の尾のとどまる木立明るめり
花栗の八方へ香を放ちたり
青葙の伸び放題に風わたる
姿よき糸瓜のゆれや瀬祭忌

所沢 南 雲 秀 子

扁額は鉄舟の筆初秋風
青栗のたわわに鎌倉古道かな
ずつしりと稲穂色づく高麗の郷
古墳見て山盛りの栗買ひ帰る
秋霖や日がなスマホに手こずれり

入間 山 口 素 基

ジャズ林檎といふを貰ひし綾子の忌
かなかなや時折休む機織る手

千葉 田 中 道 江

西郷洞窟へ光をひきて蜥蜴かな
グリーンカーテン誉めて苦瓜持たされぬ
処暑なれや久女評伝繙ける
読みをはる新聞くたくた秋暑かな
秋の蠅柱にすがる観音堂

酒々井 竹 澤 竹 里

子規庵の糸瓜重力に逆らはず
マイマイが攻め上るなり武者返し
神の田の落穂拾ふや稲雀
神仏へ捧ぐる稲穂手刈りする
○粃殻に種火一つが赤々と

佐倉 内 海 保 子

秋茄子を漬けて糠床たたきけり
北斎の墓の藪蚊の縞の濃し
虫の声雷門の植込みに
鳥威塩田平にこだまする
長屋門に立て掛けて干す今年薬

佐倉 大内 佐奈 枝

瓜 冷 や す 裏 参 道 の 金 鹽

柿の空つながらる故郷裏筑波
このあたり常陸国衙や稲の花
米びつの蓋の上なる冬瓜かな
将門の駆けし野面に月のぼる

佐倉 三 屋 英 俊

あばら屋の柿大成りや入日影
海跨ぐ銀河滔々九十九里
柿供ふ曾祖父彫りし阿弥陀仏
秋分や花筒のはな野のものに
自服の茶熱めに点てて月を待つ

佐倉 横 川 良 子

秋湿り地図の折目に破れかな
遠筑波一氣に刈田広ごれり
秋の風箏目残る宮土俵
したたかに庭片隅の猫じやらし
迷ひ来し蛙を放つ秋の夜

四街道 奥 太 雅

磨崖仏の耳朵豊か昼の虫

彈葉庫跡地に復習ふ祭笛

鶏頭の雨に艶めく綾子の忌
松根油採りし並木の松手入
どの田にも深き轍や昼の虫

四街道 塗 木 翠 雲

ぐんぐんと夏草茂る放棄畑
こぼれ萩城の鬼門の登城口
白鷺の嘴をこぼるる落穂かな
コロナ禍のオリンピック果つ柿の秋
秋没日防災無線の尋ね人

船橋 山 下 良 江

カーテンの裾ふくらませ秋の風
妹の忌や朝のしじまに蟬の声
南天の青実が揺るる厨窓
いつ迄も網戸を去らぬ朝の蟬
百日紅己が皮脱ぐ雨の中

船橋 大 山 春 江

潮風やみぞはぎ色を深めたる
大仏の遠まなざしや秋燕
リハビリの窓辺水木のうす紅葉

曲屋の梁のうねりや昼の虫
廃線の鉄路をよぎる穴まどひ

船橋 赤堀 洋子

自転車へ声のつながる青松虫

○真葛原高きを過ぐる電車の灯
亡き父子のものの整理する秋思かな

捨つるもの多き転居や虫すだく
色づくを競ふよ柿と柿の葉と

船橋 久保村 淑子

真ん丸の黄色の絵馬や小鳥来る
風ぬくる方に傾げる木賊かな
朝顔の色とりどりに天へ地へ
夕空をキャンパスにしてうろこ雲
すべり台の上より眺む今日の月

船橋 片桐 帆一

奏楽堂窓の一つに秋ともし
秋蟬や木の葉駆けをり能舞台
笈落つ手水の水や今朝白露
小鳥来る白雲木の葉をゆらし
○毬栗を割れば目覚めの粒の艶

船橋 宮本 加津代

祈る事多き八月終りけり

高鉄あやつる先の鰯雲

独り住む部屋の灯落とす良夜かな

長雨のあがりし夕べ蜻蛉増ゆ

○うすあかきすすき穂を解きしろがねに

船橋 中嶋 久登

小舟出す二百十日の沼漁師

鰯雲港に詰むる女衆

芋嵐薯蔓めぐり薯あらは

残暑てふ百葉箱の温度計

父の背猫じやらし手の寝顔かな

柏 山本 とく江

石榴の実真つ赤に弾け芙美子の居

大仏の影伸び来たり萩の花

窯場跡曲り癖ある秋茄子

○丹念にまた羽繕ふ羽抜鳥

去ぬ燕綾子好みし野川辺り

柏 内田 郁代

紅型の衣桁に後の更衣

天井の低き子規庵秋暑し
鈍色の沼面ざわめく今日白露
彼岸花中留蕾のまゝに刈り取られ
焼酎をお湯割りとせり牧水忌

柏 古川 京子

街灯に殻脱げぬ蟬さまよへり
気怠げなレースのカーテン秋日濃し
鶏長鳴く朝の刈田に放されて
山桑の実草間彌生の作かとも
穏やかな二人の暮し秋風鈴

流山 沢辺 たけし

澄心と墨書の弓場蟬しぐれ
歌垣の山に玉虫翅たたむ
月の夜はにはとこの木に甲虫
迎火を焚けば後ろに父と母
一すぢの小径造らん大花野
葉から葉へ雨こぼれゆく断腸花
水漬きては水払ひては萩の花
アルミ缶片手で潰す終戦日

流山 穂 莉 照子

鳥湧いて釣瓶落しの空を占む
蛇穴に電池切れたる体温計

浦安 田中 幹也

茶にちぢむ葉の間を縫へる秋の蝶
初秋や一灯淡き古本屋
蛸や竿を横たふ渡し守
行き止まる露地の細道木歩の忌
粗壁にべか舟吊るす良夜かな

東京 降幡 加代子

闇の底よりじわり／＼と蟬の声
桜の樹皮一面に苔生ふる
苔生ふるいしぶみに枯葉散る
蜜蜂の木槿の花にもぐり込む
蜻蛉の池の水面を叩きけり

東京 須賀 允子

子規庵の糸瓜は如何にと思へども
毎朝の一声嬉し木葉木莧
木瓜の実の歪む大小悪戯つ児
○曼珠沙華白一本を先がけて
お中日待たず消えたり彼岸花

東京 名 和 政 代

白露けふ帽子をかぶる埴輪かな
幣を挿す陶土の窯場秋の風
外濠の日本語学校鳥渡る
秋の蠅耳で払ふや牧の牛
葡萄狩にはとり三羽放ち飼ひ

東京 山 本 絢 子

葉桜に風鳴る夕べ訃の知らせ
華やかに生きし友逝く遠花火
山莊の奥へ奥へと萩乱る
白鳥になりて踊る子秋うらら
曾孫のバレエ見惚るる秋の暮

東京 藤 田 裕 子

秋雨に芯まで濡るる木椅子かな
テープ切る盲ひの走者に秋の雨
墓洗ふ形見の時計ぬらさぬやう
九階の屋上庭園赤とんぼ
起重機の腕上りゆく秋の空

東京 赤 松 郁 代

小流れを首を振り上げ穴まどひ

竹伐つて杉皮葺の桶とせり
石積みの間にもぐれり穴惑ひ
根回りに子規の墓石の傾ぐ秋
コスモスに海よりの風しなやかに

東京 島 野 ひ さ

富士昏るる荒川土手の初芒
新涼や荒川のぼる浚渫船
鯊の川潮目確かめ竿おろす
花野道暮れてほのかな香の籠る
命日の夫と一献菊の酒

東京 加 賀 葉 子

夫の顔かすみがちなる秋彼岸
尻丸くぱんと張りをり秋の茄子
○秋に哀しう深見けん二の句集手に
募金に立ちし赤い羽根には金の針
舟宿の代替りして鯊日和

東京 久 留 島 規 子

長月の雨や災禍の果てしなき
ぼろ布で磨く白露の外流し
小説の虚構に浸る夜半の秋

親指の爪ほど朱き茨の実
山積みに売らるる梨の歪かな

東京 下 嶽 孝 一

黙たうの指をほどけば赤蜻蛉
繫がれしままの川舟草雲雀
睡蓮のひらく音待つ朝の池
宇宙旅行の正夢となり月涼し
天道虫飛び残像の七つ星

東京 杉 浦 一 子

さらさらと水の音にも秋を知る
里山に朝日差し込む薄もみぢ
名水に心ひかるる新走
淋しらのまた一人増え秋彼岸
仏塔に見え隠れして後の月

東京 草間 三 香 子

鉦叩き闇深くして露地暮し
渡し板の間みぞ萩立ち上る
野ざらしの釜の底落つ秋の雷
早々と厨に立てり鴈の朝
烏瓜の蔓たぐり寄す婦警かな

東京 岡 村 純 子

虫の声途切れず坊の雨あがり
せせらぎの音ゆるやかに花野行く
竹林の風はたと止み黒揚羽
すぢ雲の赤うすれつつ秋暮るる
寝つかれず星飛ぶ窓を開きけり

武蔵野 砂 地 宏 子

基次郎の檸檬の月が昇つて
秋暑き病室の闇祖母逝きし
子規の忌の夜風きれいに吹きにけり
母と吾の歩きし土手の彼岸花
文字薄き碑の上秋の蝶

調布 大 林 彬 彦

秋の浜拉致の母待つひとみさん
かなかなに揺れはじめたる遠山河
いのししの掘りし畑を均しをり
大佐渡の里山にて
山の音海の音して栗ひろふ
天蓋のごとき黄もみぢ紅もみぢ

立川 疋 田 華 子

鈍色の空へ実となる紅芙蓉

啄木鳥やここぞとばかり叩く音
城山に残り火あまた曼殊沙華
泊夫藍や小さく別れの十字きる
渡し場に白粉花のうらさびし

町田 吉 中 愛 子

重陽の雨や小分けの遺品皿
○9・11うつかり熟柿踏みにけり
立てて読む美人画釣瓶落しかな
新道の我が前をゆく閻魔蟋蟀
地を歩む秋の彼岸の黒揚羽

町田 広 瀬 俊 雄

色草の吹かるゝまゝや古戦場
人骨も鏃も塚に秋の風
信玄の退きし峠や初紅葉
谷戸の田の土塊わりて螻蛄なく
一陣の風となりたり稻雀

町田 桔 梗 純

約束へはづむ足取りつくつくし
たゆたへる黄葉に日差し神田川
蟬蛸飛ぶ夫の手元の草ゆれて

菊の酒供へ写真と語る宵
父の齡超え恙なし曼殊沙華

日野 喜多 尾 明 子

朝の窓萩近ぢかと口漱ぐ
秋茗荷さぐるや風の湿りきて
鰯雲父母在さずとも生家あり
手桶下げ母追ひかくる秋彼岸
霧去りて眼前に沼新たなり

横浜 榎 本 文 代

したたかな雨に暮れたり盆三日
南瓜煮て戦の止みし日なりけり
手に触れし翅のかたさや黒揚羽
爽やかに紺の風呂敷ひろげたる
夫のもののまたひとつ減り秋の蟬

横浜 西 本 才 子

水草に翅合はせたり銀やんま
飯桐の実青空深く仰ぎたる
破芭蕉月なき闇となりにけり
谷戸の田の果てまで寄する稻穂波
甕据ゑて御成通りに新酒売る

横浜 川 越 昭 子

徳善寺萩咲き終へし一花のみ
マスクして午後四時よりの散歩の人
滑走路より戻りし霧の練習機
銀杏の落ちるにまかせ宮の森
夏果つる病院通ひの続く日よ

横浜 大 橋 雅 子

秋蝶の縋るる翅音激しかる
丹沢の藍の山並秋日和
旧伊藤博文金沢別邸にて三句
重陽や箸置きに黄の小菊添へ
菊模様の器の膳や後の雛
海よりの新涼の風博文邸

横浜 山 崎 郁 子

玄関に魔除けというて唐辛子
自家製てふ鱈子を売る朝の市
暁や秋の大気を深呼吸吸
千枚の海向く刈田能登の果て
接種終へ帰る野道に栗の毬

横浜 田 賀 煤 恵

身辺の影の濃くなる九月かな

草じめりして野葡萄の色づきぬ
○橋桁に絡みて咲けり葛の花
空瓶に野菊いつばい駐在所
秋冷や濡縁古びゆく色に

川崎 山口 千代 子

○野の草と夕日を入れて虫の籠
あらくさの伸びくる速さ白露かな
枝から枝へ下がりしままや蛇の衣
秋の草乱るるままに活けらるる
宿坊の長き廊下や秋冷ゆる

川崎 新 妻 奎 子

秋霖やクロワッサンを焼く朝
振り子時計ゆつくり止まり秋暑し
濡れ縁を風渡り行く賢治の忌
秋草をたつぷり夫の忌を修す
待宵の月に誘はれごみ出しに

川崎 大 久 保 進

玉砂利を踏みゆく背や終戦忌
休業の裏戸に残る秋簾
たばこ屋の木枠の小窓秋の風

秋の灯や備忘のメモの殴り書
夜の野分枕に耳を押しつけて

鎌倉 恒川 清爾

鉛筆を削る木の香や今朝の秋
名月を見せむと車椅子の母
故郷や月見団子の大きかり
秋深し一人聴き入る駅ピアノ
秋灯や枕に硬き広辞苑

横須賀 織田 みさゑ

大空の果ての果まで鰯雲
丹念に揩る墨なりし芋の露
休耕田畦にぎやかな彼岸花
秋澄みて写経の筆のはかどりぬ
吾亦紅さはつて見たき花なりし

伊勢原 佐藤 和子

歌ながれ白秋館のこぼれ萩
○曼珠沙華石工の墓の荒れ果てて
忌の膳のもつてのほかの芥子和へ
穴に入る途中の蛇の赤きかな
チェーンソーの一日うなる秋の山

生き物の爪あと著き秋の山

桑野 佐藤 嘉洋

秋霖や地層の路肩崩れたる
蜜を吸ふぜんまい伸ばし秋の蝶
首塚の月明りして右府の歌碑
谷越しに阿夫利嶺仰ぎ葛かづら
灯明に浮かぶ如来やちちろ虫

富士 神田 美穂子

藍あせし日覆昭和の定食屋
涼しさや門のとびらの青海波
稲光伊豆半島を総営めに
コロナ禍に続く家居や夏果つる
乗り継ぎて御殿場線や稲の波

静岡 大村 峰子

草の絮一つが風を乗り替ふる
松虫草鹿除け網に囲まれて
あけび実にバス停の位置かはりたる
梶の葉を御林守より賜りぬ
アスファルト過る沢蟹峡晴れて

静岡 海野みち子

供花に足す夫の好みし百日草
蜂抱へ逆さに縫るいぼむしり
○イヤリングにしたきと思ふ臭木の実
子を抱く猿と逢ひたり合歡の花
馬追ひ来夫の手擦れの歳時記に

静岡 宮崎知恵美

秋の蝶カーブミラーに縫れをり
くちなしの香りの坂を仰ぎゐる
杣道に震へてゐたる仔鹿かな
昼寝する親子の足の向き揃ふ
臭木咲く山の華やぐひと所

静岡 長島 操

時鳥鳴くや廃校あたりより
虫時雨聞きつ雨戸を閉めにけり
今朝も鳴く三光鳥のホイホイホイ
青竹を貰ひて帰り盆仕度
猿騒ぐみんなみん蟬の鳴く背山

静岡 岩崎 武士

二百十日接種予約の列長し

威銃猿は一度も振り向かず
鯖鮎の流れを待てる鷺二つ
地藏盆駄菓子袋を子らに分け
鄙の戸の風呂焚くけむり秋の暮

静岡 曾根

満

慈悲心鳥波を平らに湖青し
フルートを奏で湖割る涼み舟
時鳥日裏となりし湖へ鳴く
農のもの箱にて届く終戦日
がまずみの実の赫々と三角点

静岡 藤原千代子

雑音の父のラジオや敗戦忌
眉細く揃へ秋暑のマスク掛く
学校の裏の一枚早稲を刈る
朝顔の錆の蛇口にからまれり
川の字に秋の金魚の昼寝かな

静岡 荻野加壽子

長き夜や人のごとくにポスト立ち
ダリの髭ぴんと尖れり涼新た
一人づつそれぞれの月木歩の忌

靴下のどちらが左秋暑し
ソーサーに乾くレモンや倦怠期

静岡 小川 明 美

合歡の花雲ゆつたりと解けたり
身の丈を越ゆる葎の茂る徑
木道に蒲の穂一本転がれり
神将の眼の尖り残暑なほ
縁日の太鼓を復習ふ子の涼し

静岡 藤本 節 子

本棚に句集ぎゆう詰頼祭忌
ひたすらに土掘る工夫木歩の忌
ラーメン屋に激辛の文字秋暑し
転がされ人待ち顔の冬瓜かな
鬼の子の蓑に青さの残りけり

静岡 大長 文 昭

蓮の実の風を選びて飛びにけり
父の忌や畝高々と大根蒔く
毒茸手のひらほどの傘真白
躊躇の水深閑と盆の月
子規の忌や五つ平らぐにぎり飯

静岡 加山 ひさ子
蟬穴に水注ぎたるをさなかな

日唐傘の陰を分け合ふ母子かな
老いの物の総てに名前とろろ汁
秋暑し土の匂ひの路地に住み
減反の畦を朱に染め彼岸花

静岡 吉野 美智子

夕顔の確と折目の蕾かな
指先の先まで洗ひ今朝の秋
枝豆のひすいの覗くがんもどき
抽出しに父の呼子や終戦日
酒蔵にのこる煙突みみず鳴く

静岡 石川 裕 子

縮緬細工めきたる紅の芙蓉かな
師の墓へ蕾真白き曼珠沙華
鈴虫の鈴のふるへや仕舞風呂呂
あんぱんの臍の深さや頼祭忌
毬栗の残り三つへ棹伸ばす

静岡 望月 敏 男

秋暑し罪を負ふごと坂上る

チエンソーの銛をちこち秋暑し
夢二の忌顔半分の仮面かな
物差しに妻の旧姓良夜かな
黒帯を締めれば師範生身魂

富山 若島 久清

立山を窓に辣韭の本漬けす
秋忘れ鍋の上げ下げ自在鉤
刈り時の札上げて去る毛見廻り
山ぶだう摘むや飛驒路の霧の中
○わびしさに又糲殻を燻らす

射水 成瀬 真紀子

○台風一過沖まで泥の潮目かな
石積みの棚田に稲穂垂れ始む
早稲の香やキーンの訳の芭蕉句碑
流木の橋打ちつくる秋出水
聖火消ゆさはやかに座す盲導犬

金沢 岸川 素粒子

雉の眼の消えざる光楸邨忌
郭公や蟹の捨てたる塩気井戸
○はまなすや手繰る記憶のむしろ旗

穴を捨て殻捨て蟬の老迅し
不死男忌や身内に育つ瘤一つ
○掬はれて金魚の孤独始まれり

金沢 田村 愛子

泰山木藩祖の宮に人絶えず
○夕涼し茶屋に四つの出入り口
欣一と綾子を恋ふや盆の月
夏つばめ老舗旅館の軒借りて
産小屋の建付けわろし夏つばめ

金沢 井村 和子

古新聞溜まりに溜まる残暑かな
風死すや日にち薬を忘れまじ
予後の身を娘に諭さるる夜の秋
夫在らば米寿の祝十六夜
組板に新涼の水はじけたり

金沢 中條 睦子

捨て畑をうづめて風の猫じやらし
冬瓜を力石のごと持ち挙ぐる
姉の墓までの急坂釣舟草
走り蕎麦まだ花残る畑を見て

○てのひらに水の重さの新豆腐

金沢 今越みち子

那谷寺や日当たる杉に残る蟬

夕月夜地震にすぐさま電話来る

平仮名を覚えし手紙敬老日

敬老日金の菊なる包み紙

○ひややかや玄関先を掃除して

一揆城や足竦みたる天狗茸

金沢 伊川玉子

白山は雲に隠るる蕎麦の花

小鳥来る餅喰ひ地藏の字のうする

まとふもの無き蓑虫の吹かれをり

草紅葉まよひ子石の謂れ読む

○犀星の字のちまちまと石路の花

金沢 伊藤美音子

茗荷の子匂ひもろとも摘みとりぬ

新涼や苔のみどりの定まりぬ

一本を持て余したるラムネかな

○川とんぼ戸毎に架かる木橋かな

蛸壺の積みあぐ闇やちちろ鳴く

金沢 高田たみ子

補聴器に風を切る音秋来る

彫り始む石仏寝かせ寺の秋

さやけしや鼻筋とほる法然像

光秀の祈願せし宮秋の蟬

置き葉使はぬ日々や零余子飯

金沢 豊田高子

攻焚きの窯の火飛んで星飛んで

犀川の河口てらてら望の月

鬼の子の糸一本の孤独かな

照り翳る蕎麦畑密にさわさわと

水澄みて大きな顔の鏡池

金沢 松井佐枝子

秋時雨電池切れたる置時計

○黒々と忍者のごとし松手入れ

金秋の美術館いで鯛茶漬

菅笠のほどよき傾ぎ風の盆

待合の椅子の罰点薦の窓

金沢 石川純子

電球にりんごあめ照る秋まつり

買物の小錢握りて夜店の子
笑栗の三兄弟や地に弾け
山の香や栗の皮剥く夕厨
にはとりの緩き足取り草の花

金沢 河野 尚子

茶屋町や魔除け唐黍軒に吊り
パソコンを閉ぢて夜半の虫の声
朝焼の空へ声あぐ地引網
酒蔵の醸す泡音後の月
新幹線の信濃一瞬蕎麦の花

内灘 塩井 志津

新涼をともし来たる沛雨かな
渦尻に靄たちこめて秋の雷
山の田や案山子一人を置き去りに
抜け徑を覆ひつくせる真葛かな
神嘗祭へ供ふ穂を抜く乙女かな

七尾 谷 渡 末 枝

新涼や大黒柱に風の翳
岬道二百十日の草揺れて
夕づくや刈田のにほひ村包む

動かねば木の屑かとも枯蟪蛄
初鴈や箴を二度打つ木綿織り

敦賀 石田 野武 男

米一合産屋へ供へ海女の盆
○俘虜の日をぼつりと語る生身魂
泣き弥勒まつる古刹の松手入
秋の鷹峨峨たる崖を住み処とす
砂を這ふ防潮松や雁渡し
障子貼る平家の太刀を寺宝とし

敦賀 倉谷 紫 龍

鯉太る儒学の里の夜の秋
花木槿京へ七里の番所あと
昼幽き木曾三川を鮎下る
産小屋の残れる村や葉種蒔く
秋早馬借問屋の土間乾く

敦賀 倉谷 ます 美

ほうほうとなだめつ鵜縄さばきけり
新涼や五トンの鐘のこだませる
霧の湖虚子の句碑たつ浮御堂
秋薔薇のアーチ抜けゆくワイン蔵

あだし野のとりと坂や紅葉散る

敦賀 鶴田 勝子

秋立つや鬼門に盛りし浄め塩

岩鼻の真下秋潮渦をなす

靈時^{かいじ}簿に父の名太く終戦日

霧襖一乗谷の栄華あと

小萩散る芭蕉遊びし色ヶ浜

大阪 入山 繁幸

穴太積の垣に染み出る秋の水

薄緑少し混りぬ今年米

望の月今宵ワインとシャンソンと

灯台の灯を一隅に大銀河

川上は葛城の嶺屋の虫

徳島 福島 吉美

薬剤師三坪の棚に袋掛け

瀬に架くる仮の板橋鮎の川

大暑来て鼻緒の溶くる庭草履

蹲ひの水に溺るる黄金虫

水打つて新聞記者を待ちにけり

徳島 村上 和義

垂直に潮吹く鯨室戸にも

リズムよき機織る音や蕎麦の花

宇宙船闇夜に光る神の旅

○踏ん張れど一步の重き蓮根掘

粃殻のくすぶる煙秋の暮

徳島 宮西 修一

リモートの家族写真のお中元

牛の尾の打ち損じたる秋の蠅

白露や杖に託して試歩の朝

ピザ窯はイタリア仕込み居待月

認知機能検査終了鰯雲

徳島 平岡 功

濡れ縁まで丁寧に拭き盆用意

盆の月影絵めきたる渡月橋

故郷を攫つてゆきし秋出水

○粉ひき唄澄む奥祖谷の新豆腐

○滑走路焦ぐるにほひの残暑かな

室戸 安岡 みさき

○台風が来るぞ来るぞと釘を打つ

○海真白台風銀座室戸岬

五百岩を打ちてのみ込む野分波
良き友を得て良き老後月の宴
一病と付き合ふ余生子規忌かな
月昇る海へ真向きし志士の像

高知 仙頭 宗 峰

○瘦せたくて歩く人らよ敗戦忌
故郷は年々遠し盆の月
一人でも月見は月見庭に佇ち
忘れたの一語が決め手生身魂
地図に無き道は花野に尽きにけり

長崎 丸 本 祥 夫

遠泳終へ一氣に飴湯飲み干せり
風にドア突然閉まる桐の花
みみず鳴く土蔵の茶釜赤錆びて
刑務所の残りし煉瓦蔦紅葉
○去来忌や老舗閉ぢたる鼈甲屋

那覇 前田 貴 美 子

木の実踏み風聴くことも旅心
秋風や首里に未し祝ひ謡

すすきもて芒打ちたる夕ごころ
愚痴こぼす人が隣に柘榴実
街疫禍猫は月下に草食めり

那覇 大 湾 宗 弘

影重ね桜古木の猿茸
老猫はゑのころぐさに振り向かず
実になつて風船葛だと分かる
藤豆のすぢを取りつつ子を叱る
みやらびの唄ふ齒口や月あをく

那覇 比 嘉 半 升

棟上の口上掠ふ秋の風
風を待つ首里酒蔵の木槿垣
秋雨や王の神屋のトタン屋根
秋蟬や昏るるに早き殿内跡
こほろぎや豆電球の外厠

那覇 當 間 シ ズ

喉濡らし男水飲む残暑かな
十円玉側溝へ跳ぶ今日厄日
路地裏に煮炊きのにほひ秋涼し
草の穂で編みし魔除けを見にもらひ

土手に三線爪弾く影や小望月

那 朝 中 本

清

西 原 宮 城

勉

みるく神笑まひて島の豊年祭
寿ぎの三線和せり虫の闇
舞ひ終へて菊酒酌めり男衆
御涼傘^{りやんさん}へかよふ秋風首里大路
星飛んでニライカナイの芯となる

那 朝 謝 花 寛

宮

登見城 渡 真 利 真 澄

九十の母の手鏡 鳳仙花
二期田刈る頃とや風の恩納村
溢れ出てビール工場から満月
故郷に墓を残せり曼殊沙華
いもうとに死の翼くる星月夜

宜野湾 吳 屋 菜

々

炎^{コロナ禍二句}ゆ空と海を眩しむ終戦日
エイサー太鼓今年は聞かず盆の月
盂蘭盆や独りに広き仏間かな
門前の盆の名残の島線香
パイアの落ちて砕くる野面積

捨畑や月桃の実の鈴生りに
○語らひの廃れし村井昼の虫
夕月の北山城址秋の声
山原の分厚き真闇虫時雨
缶蹴りの誰彼黄泉へ赤とんぼ

青パイア琉舞稽古の窓明り
朝練の三線の音秋立てり

○秋きぬとお香を選ぶ機織女
燃糸機に残る暑さの油差す
朝刈りの二百十日の魔除け茅
名月やつきあひ淡き両隣

同人作品投句先変更のお知らせ

令和3年11月25日締切の投句より、同人作品の投句先が左記に変更となります。

〒241-0032 横浜市旭区

今宿東町 832-1-28-306

榎 本 文 代

同人作品の佳句

内海良太

柏林に沿ひて河口へ秋の川 中鉢弘一

河口へ向かう秋の川は石狩川。一昨年、石狩川河口近くの尚古社という私設資料館を訪ねた。近くには「はまなす公園」があり、公園の南側には1キロ程の砂丘があった。柏林はそここの防砂林だろう。秋の短かい石狩河口には、なにか物語がありそうで、いろいろな想像が掻立てられる。

わびしさに又粃殻を燻らす 若島久清

秋の賑やかな穫り入れが終わると、何故かわびしく物足りない。特に作者の越中八尾の「風の盆」が今年も中止となり季節のけじめがつかない。せめて粃殻の山でも燃やして気を紛らわそうかと。原石鼎の鹿火屋守の心に通じる。

はまなすや手繰る記憶のむしろ旗 岸川素粒子

今は、はまなすが咲き平和な内灘の砂丘だが、昭和28年、米軍の砲弾試験設置に反対し、むしろの旗を掲げた村民の闘争で騒然としていた。当時金沢だった大坪景章さんからこの話をよく聞いていたが、岸川さんも同年代。「風」の社会性俳句もこの辺から芽生えたのだろうか。

台風が来るぞ来るぞと釘を打つ 安岡みさき

台風の進路予想のニュースを見る度に、安岡さんの先の尖った室戸岬の地図が目につく。近年、私の住む千葉県も台

風被害が多くて、「来るぞ来るぞ」と釘を打ち付ける場面がある。台風被害はもう御免蒙りたい。

瘦せたくて歩く人らよ敗戦忌 仙頭宗峰

8月15日が来ると思うことが多い。半藤一利さんの「東京大空襲記」にあるように、日本の大きな都市はことごとくB29の空襲にやられた。衣食住を失い、来たのは飢えと貧困。

〈短夜の飢えそのまゝに寝てしまふ 欣一〉

飽食の肥満をみているといい時代なのかどうか、飢えの時代を経験した者には皮肉の一句も作りたくなる。

去来忌や老舗閉ちたる鼈甲屋 丸本祥夫

陰暦9月10日が忌日。去来の父、向井元升は長崎の儒・医・天文・本草の大家で名声が高かった。去来、8歳のとき一家は長崎から京都へ。今の長崎に縁の商家が遺っていたのだろう。鼈甲は薬用に使われていたとも聞いているので。

犀星の字のちままと石路の花 伊川玉子

金沢の犀川大橋畔の雨宝院での囑目。寺の門に入ったすぐの植え込みに石路が一叢植わっている。雨宝院は室生犀星が幼少期に過ごした寺で、寺には遺品や直筆の原稿等、ゆかりの品々が展示されている。展示されていた詩の原稿には、「うつくしき川は流れたり」と肉厚だが小振でちままと書かれてあった。

秋に哀しう深見けん二の句集手に 加賀葉子

句集「葦濃く」は平成26年、第48回蛇笏賞を受賞した。

今月号の、「万象と共に」に、追悼記事あり。

雑学鳥獣植物戯詩

全24回

八木幹夫

第11回【青葉木苑】

幼い頃、神社の一番背の高い杉の木でアオバズクの鳴く声を聞いた。子供ながらその声に哀しみを感じた。わが家は通りを挟んで神社の入り口斜め前にあった。寝床には遠く祭囃子とホーホーという声が響いてきた。

祭の晩には母が背中に負ってセルロイドのお面、吹矢水飴、綿菓子、夜店を連れまわってくれた。虚弱な私は言葉も喋れず、五歳まで歩けなかったからだ。祭が終わる、周辺がもとの静けさを取り戻すとふたたび木苑は間欠的に鳴き始めた。気のせいかなその声は以前より暗い深みを増した。高校生になった頃、台風の影響で倒木の危険が理由で、境内の太木はあらかじめ切り倒されてしまった。あの声も聴こえなくなった。

母在りしことも夢なり青葉木苑

酒井弘司

(朱夏 主筆)

母の死後、この一句に出会った。思いがけなく涙が流れた。記憶は物や声や匂いとともにあるらしい。アオバズクの声は祭りの前後の私のからだを覆っていたのだ。母の背にすがっていた日がよみがえる。でも、母はいない。母は本当にこの世に実在したのか。あの声が母の存在や夜店を夢幻の世界に変えてしまう。今でも。

公益団法人俳人協会

俳句界 2021年12月号

毎月25日発売
定価1000円(税込)

登四郎生誕110年、没後20年

能村登四郎

「研三そして「沖」へ

〈第一部〉能村登四郎

○登四郎アルバム・30句選 ○総論「登四郎の歩み 大畑善昭 ○エッセイ「師登四郎の思い出 今瀬剛一 ○作品鑑賞 千田百里

〈第二部〉研三そして「沖」へ
○インタビュ 能村研三 ○研三30句選

○研三論「受け継がれてゆくもの 森岡正作
○「沖」50句選 辻美奈子

特別作品21句

中村國司

タラビ 俳句界NOW 山咲一星

特集 句集以前以後

○論考「句集が及ぼす変化 河内静魚
○エッセイ「句集を作ったこと 淵脇 護

奥名春江 志賀康 龍野 龍 松山好江

*セレクトジョン結社「杏長崎」深野敦子

私の一冊 田島和生「雉」

対談 佐高信の甘口で「コンチハ」
水口素子 (銀座「サボン」おかし)

「俳句界」投稿欄 一流選者14名！
日本一充実の投稿欄



※一部変更の可能性があります。
株式会社 文藝の森

お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

新しい「万象」を目指して

―来年度からの人事変更について―

コロナ禍に振り回された令和3年も暮れようとしています。

「万象」の運営や創刊二十周年の記念事業も、コロナ禍対応の特別体制で無事乗り切ることが出来ました。これも皆様のご協力のお蔭と感謝申し上げます。

令和4年度から「万象」は21年目に入ります。

これからの厳しい時代においても、健全で持続可能な、新しい「万象」の創造に向け、左記の通り人事の変更を行います。

どうぞ、皆様のご理解とご協力をこれまで通りお願いいたします。

記

一、令和4年4月1日開始（4月号から）

一、新「万象」主宰・発行人 江見悦子

一、新「万象」編集人 中村千久

一、同人作品選者 内海良太（変更なし）

一、万象作品選者 江見悦子（小林愛子から江見悦子へ）

各部門の担当者については、令和4年3月号で発表いたします。

尚、特に編集業務については、支部からの人材を数名お願いする予定です。

令和3年12月1日

万象俳句会主宰 内海良太

鳥渡る

山本とく江

新涼の沼に雲浮く小舟浮く
 秋蟬の声小流れに吸はれけり
 蛸の声澄む谷津のどん詰り
 小半日自肅を解けり紫苑晴
 秋燕や師と紛ふ影遠ざかる
 雨晴の稔り田近くなりけり
 木洩日の底染め尽す曼珠沙華
 移ろへる光と影の曼珠沙華
 師の句集読み返したる良夜かな
 カーテンを繰る朝空を鳥渡る



先の見えない自肅生活で、
 本来の句会の姿を失った淋
 しさを痛感しています。

近場の公園か手賀沼など
 限られた一人吟行では、新
 鮮な感動も作句意欲も湧か
 ず空虚な生活をしています。

然り乍ら、朝な夕な二十
 階の眺望にも季節は移ろい、
 春は桜、夏は青葉の茂り。
 秋には黄金色の稔り田がよ
 り近く見え、鳥の渡りを見
 ることもあります。

初めて夜景を見た感動は
 マンネリになってしまった
 けれども、晴れ渡った満月
 はまた格別です。

涼新た

森山 暁湖

寝かすれば眠る人形涼新た
胸元へはつしと止まる金亀子
炎天の河原這ひずるブルドーザー
人來れば大騒ぎせり行々子
訝しき雲の湧きたる原爆忌
赤腹の沼面にすいと浮きて来し
里宮の茶屋にて求む蝮酒
全身で唱ふ心経滝行者
風入れて涼しき寺の天井画
みんなみや宝物殿を包みたる



世はまさにコロナ禍時代
といっても過言ではないよ
うな状況となり、三密回避
は当り前となりました。

それに加え小生は二十二
年前の心臓疾患による後遺
症が生じ遠出のできない状
態となり、作句も車で十五
分位の所までで身辺詠とな
ってしまいました。

それでもその範囲の中に
八海山の里宮、浦佐の毘沙
門堂、清流の魚野川と築場
や八色原の開拓地などが点
在していますので、気持を
振り起して出かけたいと思
っておるところです。

俳書探訪

古川京子

『雛簀笥』福井隆子句集

作者 昭和15年北海道生まれ

略歴 昭和52年「沖」入会能村登四郎、林翔に師事

昭和62年「対岸」創刊入会、今瀬剛一に師事

現在は「対岸」同人、俳人協会評議委員、日本文藝家協会会員。千葉県八千代市在住。

『雛簀笥』は第五句集で平成二十四年から令和二年までの作品の中から三二二句を収めたもの。他に「自注現代俳句シリーズ福井隆子集」や、エッセイ集「ある狂女の話」の著書もある。

「対岸」主宰今瀬氏は帯文に「俳人は自分の主張を持つていなければならぬ、作品と文章は車の両輪で、福井さんはその二つを兼ね備えた作家である。とりわけその静かな、そのうちに燃える叙情性に私は注目している。」と記す。

まずは帯文を踏まえ、作者の輪郭を求めてみます。

冬林檎祈りのごとく一つ置く

秋の夜のシテ舞に酔ひ酒に酔ふ

この家のまん中に置き水中花

一步前へ踏み出す白き靴買へり

鳥見えぬ日は降る雪を見てゐたり

迷ひ子のごと黄落の中にをり
爽やかは健やか夫の良く笑ふ
そして

こちよく吹かれて萩の乱れけり
長き長き箱涅槃図のしまはるる
海見ゆるまで立葵咲きのぼり
天も地も消え越中は梅雨の中
蝶の如し三尺ふはと浴衣の子
水吸うて豆のふくるる良夜なり
芒の穂もう直ぐ風となるらしき

一句目、「こちよく吹かれて」の措辞が乱れ萩の美しさを
クローズアップしています。二句目、涅槃図の大きさを箱に
いわせ、非凡な句となりました。五句目、「ふは」が愛くるし
い浴衣の子の量感だけでなく質感をも伝えます。

草は実をびつしりと付け人悼む

忘れてはならじ穂草の揺れつづけ

「東日本大震災より一年半が過ぎて」の前書の二句です。

董草人間もまた寄り合へり

作者らしい季語の斡旋で絶唱の一句となりました。

B6サイズで象牙色の地に淡く古典の図柄を配した装丁も
ゆかしい『雛簀笥』は、叙情豊かな作者のやわらかな言語感
覚や豊かな感性がきわだつ句集でした。

（筆者住所 〒277-0083 柏市日立台二一四一二）

呆け封じ 山口千代子

いきなり、「呆け封じ」のタイトルに目が奪われる。作者曰く「東京生まれ、東京育ち。田舎を知らない。木の名も草の名も分からない」とあるが。身辺には移ろいゆく季語がたくさんあると思う。

忘れもの探す日多し梅雨深し

七夕の短冊に書く呆け封じ

俳諧味のあるこの二句が、今の作者の偽らざる心境なのであろう。自分を客観視することが俳句の基本。この句からは作者の体温が感じられ、他人事とは思われず共感を覚える。鬱陶しい「梅雨深し」の季語がさらに心の内を物語っている。

山門にまづ水を打つ蕎麦屋かな

門前町にある蕎麦屋は、夏の昼、山門に涼しさを招く打ち水をしている。神仏を尊ぶ心と一日の無事を祈る気持ちで籠められていて、「まづ水を打つ」が作者の感銘を受けたところであらう。

滝に湧く霧ひと筋の登りくる

轟音とともに奔り落ちる滝。あたりの空気が冷やされ、ひと筋の霧となつて登ってくる。墨絵のような情景は、幻想的で美しい。

消灯の厨に月の光かな

この句からは、暗くなった厨に忍び込んでくる月の光が静寂で神秘的。慌ただしかった一日の終わりの安堵感を伝える。

佃島 久保村淑子

エッセイによると景章先生がお元氣なころ、句会の仲間と吟行した思い出の佃島を再び訪れ、吟行した一連の作。

水飲み場競ひて並ぶ水鉄砲

佃堀の水辺は淡水と海水が混ざる豊かな環境である。釣りをする人がいたり、水飲み場には子供が集まり水鉄砲に興じていたりする。今も下町らしさが色濃く残る水辺の光景、殊にこの句にある水鉄砲が昭和の懐かしさを誘う。

曳船のうねり長々梅雨明くる

掘割の水路へ曳く船であらう。「うねり長々」と写生してあるところに長く細い水路が想像できる。「梅雨明け」の季語の明るさが路地にも広がってくるようだ。

炎天のビルを曲ればポンプ井戸

また同じ路地に出くはす額の花
一句目、ビルが林立するその下の狭い路地を曲がると今は珍しいポンプ井戸に行き当たったという、古い時代と現代が折り重なるような景色に、佃島らしさがよく出ている。
二句目曲がり曲がった同じような路地、一回りするとまた同じ場所に出たという、額の花が印象的。

佃祭中止の知らせ貼る社

佃祭は住吉神社の夏の祭礼。佃祭よそ者に路地行きどまりの鈴木真砂女の句を思い出す。今年はコロナ禍で中止となり、毎年の楽しみが無くなり残念なことである。

同人作品評（十月号）

大林 彬彦

麦秋の大地切り裂く十勝川 大内和憲

「麦秋の大地」が読者にドカンと圧倒的に迫つて来る。北海道の持つ雄大な生命力。麦の実の熟する頃の黄金風景の美と豊饒が眩しい。「切り裂く」は烈しい表現だが大地に住む人の実感だろう。川は川で強く自己実現して存在しているのだ。手厳しい北の自然と格闘し凱旋したかの様な陸と川の光景。自然詠の極致だ。久保菜『火山灰地』に比肩しよう。

自粛にも馴れし晩酌量増ゆる 佐藤 哲

地球は目下コロナ禍旋風。死者数が引きも切らない。前回（スペイン風邪）も今回も細菌研究所辺から発生している。私達に出来る事といえば自己防衛即ち自粛だ。作者はその美風美德を守り習慣化したという。『魏志倭人伝』にも其の風俗習慣の良き美しさはあり、又酒をよく飲むともある。日本人の心性と習性の美的具現が茲にはある。無季句だが、好きな句である。

蛇の衣の畔に張りつく水枯田 小松 敏郎

この風景は一読何か凄く寂しい。だがその蕭条とした映像の中にキラツと光る生命、うつくしきものを感じ受ける。寂し

い美しさと言おうか。暖い日光の下脱皮した蛇は冬眠して命を守る。水の涸れた田も所々罅割れを見せて冬の極みを晒して春を待つ。日光と水が溢れて蛇は穴を出、田は池になる春。滝しぶき肺の奥まで洗はるる 光岡れい子

一読すつきりと気持よくなる詩だ。生は快感の追求だ、と言う人もいる。その一つか。一瞬の身体感覚でキャッチした美で爽快感極まりない。私は奥多摩の滝しぶきで体現する。肺も洗浄、心もすつきりの身体感覚の詩といえよう。

釣師らの 秋田訛や菱の花 鍋島 広子

菱の花の咲く頃は湖の釣りに丁度よい季節だ。今年も釣師達がやって来た。ところが何と秋田訛だという。東北弁の所謂ずうずう弁の事か。その古里語を自在に交して屈託がない。そこに作者は感動したのだ。

沢瀉の花をまたいで次の畦 内海 保子

面高とも表記し、花慈姑の名もある。白い三弁の花を総状に開く。稲田では雑草扱いの嫌われもの、と言うが、作者は誠に丁寧に接している。健気に咲くその花を踏み汚さないようにと配慮してエンヤコラサツと無事に跨いでホツと安堵したというのだ。その達成感を心に次の畦へと進む。跨ぐが鍵語で、足場を定め細心の注意を払う優しさ。花は無事だった。

七夕や 幼馴染は皆星に 織田 みさゑ

竹を調達して来て短冊に願いを書いて吊る風情は実にいい

ものだ。(母が切る七夕竹の小さけれ)高浜虚子。竹選びからして楽しい。幼馴染ほど純粹な友情友愛に富み心置きなく話せる友はいない。それを七夕の日に作者は思い出して心中で対面対話している。皆お星様になっていくが美しい思い出は消える事なく、益々美しく磨かれてゆく。浪漫の詩。

山 山が空を押し上ぐ夏旺ん 加山ひさ子

自賛句万歳と思つた。めでたし! これは自分の姓への頌となつてゐる。山山↓加山。自姓への誇りは自然己を高めよう。この山山も押し合い庄し合い空を押し上げている。夏の熱氣盛んな山山はスクラムを組んで膨張し、空へ迫るかに見えるというのだろう。季語がピツタリ。躍動感が横溢。

祖先より伝へられたる泉汲む 中條睦子

事実そのままを詠んでゐるだけだが、写生のお手本のような美しい句。奥深いことをわかりやすく表現している。上五と中七で祖先に対する敬虔な感謝の気持ちにさりげなく伝わってくる。祖先は後生大事に泉を守つてきた。有難い泉だ。泉は源泉、その水をくむ風情が爽やか。この家宝ともいえる美しい水はお茶の水か。茶道のための水と思うと、心が清められる。普段得難い静寂美、その雰囲気を出す詩。

かたつむり笠に這ひたり芭蕉像 倉谷紫龍

蝸牛の行動範囲は広い。思いがけない所に居る。志士像の上に居たり大仏の膝に居たり近藤勇像の肩に居たりと、色々

な句を拝見している。芭蕉翁の笠に居たのは初めて。「私を詠んで」という所だろう。雨後の姿かもしれない。愛らしい。

雷鳥のこゑ湿原にこだませり 倉谷ます美

名からして凄みのある雷鳥が大きな声で鳴く。それが広い湿原にこだましたというのだ。その瞬間、湿原はきりりと引き締まり雷鳥に領されたようになったのかも知れない。湿原を独占する雷鳥の声の冴え。雷鳥よ永遠なれ、の願いが籠るか。

土佐日記ゆかりの岬都草 仙頭宗峰

土佐日記を読み直した。都草は黄金草・烏帽子草・淀殿草とも。京に多く咲いていた花という。都人の貫之が土佐に。名門紀氏も政治的に劣勢、文学で永遠性を獲得せんと貫之は奮闘。名歌と名作を残した。昔の事を偲ばせる美しい詩。

痩せ畑の痩せパイヤの大きな実 大湾宗弘

痩せ、痩せと続きどうなるかと心配になるが大きな実を成している事で先ずは一安心。生命の目的は生命の再生産。何としても実は痩せさせまいとパイヤは頑張つたのだ。豊かな実の中の種も亦十分に生命力を持つたであろう。

土用波流されまじと久高島 宮城 勉

大きくうねる波に流されまいとこらえて自立している久高島。神の島であり心の拠り所の島だ。そして作者自身を投影した存在であり「ぶれてはなるまい」という自己確認と決意が感受できる。歴史の荒波の中、久高島の様で居たい。

たびたび度忘れもする。妻からはときどき、「少しおかしいんじゃないの」と言われている。忘れないために数年前からスケジュール帳を使用し、自分仕様に手作りしている。

大きさは、内ポケットに入るB6サイズの見開き一か月、これを十二か月分十二枚。一日分のスペースが狭いのは少々我慢。ペンは、俳句、菜園、プライベートと三色に分けている。手帳にはカバーをし、アナログ人間のため色々なメモをはさみ込んでいる。

胸のポケットには、いつもメモ用紙を入れ、一枚にひと言を記し、済みしだい除いてゆく。

厨の壁の月間カレンダーには、スケジュール帳の項目を写しこみ、妻と娘に予定をオープンにしている。

母子手帳

石井 木内マヤ

うさぎのキャラクターが表紙に描かれた手帳。長年の使用で角が擦れてしまっている。二十一年前、長女を身籠

った時に貰った母子手帳である。

何もかもが初めての妊婦生活。今のようにインターネットで調べる技も知らず、不安なことがたくさんあった。

無事に長女が生まれた晩は、心の底からホッとした。その日から母子手帳には、色々なことを書き込んだ。長女は少し小さく生まれたが、二十一歳目の現在、身長は一六六センチメートル。まだ成長中という。

いづれ、この母子手帳を長女に手渡す日が来るであろう。その日が育児の卒業だろうか。いつかはやって来るとわかってはいるが、来てほしくない。

私の気持ちは、庭先の猫じやらしのように、ユラユラと揺れている。

私の紙製タイムマシン

東京 本多 葵

師走のこの時期、新しい手帳を準備するのが恒例になっている。どんな予定や事柄が書き込まれることになるだろうかと、少し先の未来を思ってわくわくするひとときだ。

そして、大掃除の合間などに、古い手帳を読み返す時間もまた楽しい。知りたかった曲の題が走り書きの字でメモされていたり、散歩の途中で見つけた花や葉がはさまっていたり…。

パソコンでのスケジュール管理も便利でよいのだが、この「紙製タイムマシン」でのちよつとした時空旅行が楽しくて、なかなか電子化が進まない。

そのようなわけで、私の机には、捨てるに捨てられない手帳が、常時数年分積み上げられている。決してずぼらで整理が悪いだけだからではない…はず、と言いつつおこう。

「万象ノオト」投稿募集

▽3月号「得意料理」(11月末日締切)

▽4月号「花 束」(12月末日締切)

▽長さ 本文 17字×19行以内

▽投稿先

〒417-0861

富士市広見東本町14-14

神田 美穂子

俳句四季新人賞

受賞記念作品30句

織田亮太郎

倉木はじめ

※巻頭三句

長谷川權

久保純夫

富士真奈美

大輪靖宏

渡井恵子

井上論天

※今月の華

辻村麻乃

渡辺誠一郎

※その時 俳句手帳

伊藤政美

※俳句と短歌の10作競詠

榮猿丸

横山未来子

俳句四季新人奨励賞

受賞記念作品30句

星野いのり

俳句四季新人賞

最終候補者競詠5句

お家で山歩き

駒ヶ岳・白馬

※好評連載

藤枝リュウジ

575の散歩道

筑紫磐井

坂口昌弘

青木亮人

忘れ得ぬ俳人と秀句

俳句へのまなざし

神作研一

手のひらの江戸

古典籍を旅する

藤村公洋

俳句のつみみ

二ノ宮一雄

俳句四季

Haiku Shiki

2021年12月号

11月20日発売
定価1000円(税込)

<http://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

特集 俳人・評論家100人 年末アンケート

特別企画 昭和・平成・令和の歳末

巻頭作品10句

落合水尾・隈 可須奈・佐藤文香
鈴木章和・染谷秀雄・夏井いつき
橋本榮治・和田順子

俳壇

12月号

11月14日発売
定価900円(税込)

巻頭エッセイ

原 朝子

八木健道 滑稽俳壇

連載

ものがたりのある俳句……………青木亮人
先人のことば……………宇多喜代子
いきもの歳時記……………角谷昌子
俳句史を見直す……………秋尾 敏
難解俳句を語る……………栗林 浩
小説・遥かなるマルキーズ諸島……………マブソン青眼

俳句と随想12か月

菅野孝夫・柴田多鶴子

本阿弥書店

〒101-0064

東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

宮田 千恵子 (福岡)

巻頭作家 (十一月号) プロフィール



宮田千恵子さんは昭和十八年佐賀県に生まれた。彼女がまだ母上のお腹に在ったころ父上は出征、間もなく戦死されたという。その後母上の実家である福岡に落ち着き、現在にいたる。五歳年上の姉との二人姉妹で、働く母に代わって面倒を見てもらった、と姉を慕っていた。結婚後、夫婦で起業し、平成十四年に夫を見送った。

俳句との関わりは、二十歳くらいの時友人の母親が開く「俳句友の会」を短期間覗いたことがあったという。平成十七年、福岡の井山幸子さんが開く「芙蓉句会」に参加、メンバーは八・九名。イベントで盛り上げて貰い大変楽しかったと語る。指導者は賑やかな人

ではあったが、いろいろと工夫を凝らしていたのであろう。初入選は平成十八年一月号。

コスモスの波うつてゐる無人駅
新米を炊き田の神へ供へけり
ゆとりのある詠みぶりは作者の持ち

味なのだろう。十九年から三句欄にも載るようになったが、二十八年三月指導者の井山さんが逝去された。半年ほどは各自で投句していたが、二十九年二月から私(小林)と通信指導という形で四年半ほど続いている。

それに、令和二年「万象」選者であった飛高隆夫先生が逝去された。千恵子さんは二十八年頃より四句、万象作品の佳句に度々取り上げられるようになり、具体的な批評も得ている。

炬燵舟唄も乗せゆく川下り
さへづりを柩の姉と聴きにけり
年新た水豊かなる筑後川
夫の忌をこの秋晴れの一日かな
むらさきの風の育てし秋茄子

「炬燵舟」では、唄も乗せゆく、がこの句を楽しくしている。また「さへづり」は哀切な句。柩の中、花に埋もれた姉(義姉)が、この世で触れる最後の音。それが明るく楽しい囁きであることが、救いと述べられた。

昨年からコロナ問題で皆苦慮しているが、千恵子さんは句作りと、民生委員・社会福祉協議会活動と忙しい。

田水張る大河の水を貰ひけり
あやとりのからみたる指桃の花
姉の初恋蜜袋にしまひおく

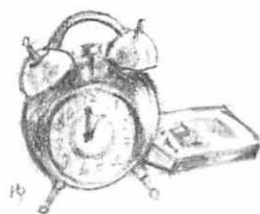
閑達な気風に繊細な神経、最近は何材の幅も広がり自在になって来た。この度は次の句で巻頭である。

雷走るひとり昼餉の卓に向き
鯉鍋の水菜の青の際立てり
鰻食ぶ壁の写楽にのぞかれて
故郷の田を巡りきて端居かな
そこはかとなけり可笑しきも感じられ
る。どうぞ自由奔放にご活躍を。

(小林愛子)

万象作品

小林愛子選



竹筴に笹のかをりの新豆腐
泣き止みし児の手の熱しちろ鳴く
横浜 小板橋泰山

川風も馳走にしたり鮎の膳
通過する小さな駅の盆踊り

蜂蜜の固まり始む白露かな
札幌 北浦詩子

秋麗や山襷深き馬籠宿

青蜜柑長引く手術終り待つ

閉店のシャッター軋む秋の風

月光を待つ護摩堂に燭ひとつ
札幌 高山誓英

護摩行の果てて迫れり虫の闇

風切つて唸るアンテナ秋刀魚船

湯豆腐にでんと昆布布く島の宿

寝入るまでつき合うてをりちろ虫
静岡 長谷川秀子

星月夜波さらさらと引きにけり

荒草の中に燃ゆるは曼珠沙華

白壁に影でんと吾亦紅

透き通る鼓動の浮遊水海月
大和 中谷由郁

ひまはりの群生押し寄する颯

魚屋の前掛け凜々し秋鰯

日曜日窓いつぱいの鰯雲

雨の日の雨の音聞く終戦忌 福岡 宮田千恵子

水の鳴る音がうがうと盆の川

蝶飛びて新しき風萩の風

秋天やバックミラーに雲走る

雲の峰を軽々背負ふ男体山 芳賀 福武幸子

せせらぎに足をまかせて水遊び

盆の僧足袋の疲れてもどりけり

風湧きておしろい黒き種子こぼす

出港の汽笛伸びやか今朝の秋 小松島 岡田あゆみ

白々と流木臥せる秋の浜

原爆忌なかなか落ちぬ砂時計

鶉鳴いてうどんの匂ふ札所寺

真つ新のシャツに染みたり百合花粉 新潟 高野松風

炎天にふくむ二粒塩の飴

鬼やんまラジオ体操つきぬけり

いくたびもルアー高鳴り夏の雲

図書館の窓のさみどり蔓荔枝 東京 桑原優美子

屋上に見し流星の尾の曳けり

秋暑し閉店告ぐる古書の街

月光の僅かにそそぐエスカレーター

竿燈のことに美し撓りかな 千葉 松浦陵保

星飛ぶやまたぎの里の頂に

カンテラを提げて露天湯螢の夜

市街地へ向きて裸婦像秋の風

秋入り日沃野貫く一直路 札幌 佐々木茂

日燦々並木の林檎色づきぬ

コロナ用マスク外せば涼新た

稲刈りや青い瞳の実習生 島崎 洋

炉端焼暖簾の外は霧の夜

じゅんさい沼かしがる舟に爺独り

牧駆くるサラブレッドや涼あらた 園田 鶴子

青木槿空の青さと花の青

木に登る髪切虫の落つる音

捕虫網の子シャツもズボンも大きくて 竹重 富子

驚草や池のほとりに日のさして

線路の向う丘にあふるる萩の花

空の青淡しと思ふ今朝の秋 谷 廣司

石狩の雲重き野良秋耕す

納骨や喪服の肩に赤とんぼ

秋めきて家路に向かふ影長し 船橋 明美

新涼や愛犬連れて川辺まで

新 齋藤 信

食卓にコスモス飾り白ワイン

札 八代洋子

けふひと日恙なきかな八月尽

札 八代洋子

湖ぞひに続く木道花さびた

札 八代洋子

一両車八千草原に見えがくれ

札 八代洋子

菜園の西瓜小振りも甘味増し

吉田克己

朝顔が目の高さに咲く窓辺かな

吉田克己

オリンピック雪水桜とひまはりと

吉田克己

秋日和庭のベリーは生り年に

江 別 太田佳美

鳥兜アイヌの森に風の立つ

江 別 太田佳美

新米の幟はためくおにぎり屋

江 別 太田佳美

新じやがの小粒集めて塩茹す

新 曾野部礼子

鮮やかに甘酢に浸る茗荷の子

新 曾野部礼子

零れ種鶏冠揺らして鶏頭花

新 曾野部礼子

鳥海山の裾野の長し花さびた

東 根 門脇好子

畑隅を灯してゐたり簪草

東 根 門脇好子

朝日射す曾々木海岸島萱草

東 根 門脇好子

寄りかかる柱のきずや秋時雨

新 高 柿原キヨ子

新涼や寿司屋ののれん寿の一字

新 高 柿原キヨ子

一雨に昨日と違ふ草の花

新 高 柿原キヨ子

父の背を小さきと思ふ秋の雲

新 齋藤 信

重陽や母の受診へ付き添うて

新 齋藤 信

露時雨面持ち個々のこけしあり

新 齋藤 信

聞かされし会津盆唄目に涙

新 齋藤 信

外科病棟月下美人の咲き匂ふ

新 齋藤 信

月下美人ふつくら閉ちて終りけり

新 齋藤 信

幾重にも青の重なる夏の山

新 齋藤 信

木下闇白杖の人長椅子に

新 齋藤 信

屋根越えてまた大屋根へ黒揚羽

新 齋藤 信

草刈女のかつては着たる亀田縞

新 齋藤 信

水羊羹デーサービスの三時かな

新 齋藤 信

如露の中出口深せる蜥蜴かな

新 齋藤 信

くつきりと山の稜線秋に入る

新 齋藤 信

高まりし夜半の雨音盆終る

新 齋藤 信

禅寺の戸車障子音涼し

新 齋藤 信

海青く玫瑰赤く色づけり

新 齋藤 信

傘買うて戻れば夕立あがりけり

新 齋藤 信

朝昼夕交はす言葉は「あつちえね」

新 齋藤 信

引きなほす駐車のパンキ涼新た

新 齋藤 信

隣家の境を掃きて盆用意

新 齋藤 信

焼きたての腸より食し初秋刀魚

鬼怒川の瀬のきらきらと月涼し

宇都宮

福田 弘

稲光一の鳥居の浮かび立つ

咲き切つて向日葵の皆うなだるる

父親は子等の標的水鉄砲

芳賀

稲川 清子

鳳仙花種子飛ばしては子等の声

厨から香り漂ふ今年米

カチューシャの幼かけ寄る赤とんぼ

鹿沼

渡辺 利子

秋の雨更地となりし隣家かな

秋雨を飛ばしパラリンピックかな

八月や地図帳で知るベラルーシ

栃木

飯塚 キミ

あかときを鳴くかなかなの一途なり

射干や猫に開けをく玻璃戸なる

生身魂そろり客間の上座へと

飯塚 キミ

針箱の整理すみたる雁の頃

信号を待つ間に取るや牛膝

男体山の全容見ゆる夏の果

佐野

荒川 進

高きより湯滝のしづき硫黄の香

妻を呼ぶ一瞬にして流れ星

ゴンドラで一望夏の八ヶ岳

飯塚満里子

夏帽子行く入笠山の花畑

射干の朱色すつくと草叢に

初個展のブロンズ像や法師蟬

佐野

木村 君子

萩の花万葉の歌碑めぐりけり

団栗を両手に三疊山下る

三疊嶺をいま満月のはなれたり

遠くより秋蟬の声庭昏るる

かつてここは下駄屋でありぬ桐一葉

女郎花咲く畦道を戻りけり

白木槿雨をたつぷり含みけり

百日紅正造旧居の中庭に

ジーパンの裾を繕ひ涼新た

葱刻み夕餉の仕度初ちちろ

落蟬の草の中より上りくる

狐の剃刀木洩れ日に朱をこぼしたり

夏薊 白雲 迅き霧ヶ峰

助手席の窓に触れたる初芒

テラスで飲む朝の珈琲鬼やんま

早稲の香や小鷺一点見つめをり

蕎麦処水辺に映る曼珠沙華

黒川しげ子

齋藤ミチ子

関口かつ子

店網洋子

仲山さよ子

鴝色に染まるあらめの鰯雲 佐野 菰原美穂子

石堀にびたり張り付く秋の蝶

貴船菊鏝阿寺通りの路地にな

夕立や夫の墓石に傘させり

義本美智江

堰越ゆる流れ渦巻き夕化粧

梧桐の莢の撓るる川の端

古書店の古本匂ふ残暑かな つば 藤原善明

図書館の閉館時間法師蟬

秋めくやシヨパンのソナタ聞こえたり

雷鳴のひびく町中八月尽 さいたま 須藤初枝

ひまはりや画廊喫茶へつづく怪

ガラス戸に黒猫の影秋の雷

突然の雨に鳴き止む蟬しぐれ 志木 汐見克彦

いつになく饒舌な父酔芙蓉

シャガールの男女飛んでる虹の中

唇にグラスあてがふ夜長かな 森山洋之助

ひとりだけ俯く下校子刈田道

独り居の留守宅守る秋風鈴

空の揺れコスモス揺るる道の駅 川越 岡野輝子

秋蝶や米寿の祝畏まる

大雨に沈む稲穂の色づけり

秋の夕聞ゆる風と見ゆる風 川越 常見イツ子

新涼や小河内ダムの空広く

秋高し程好き疲れデーの帰路 古河 青木正男

紙魚食める晶子の歌や腰屏風

教頭がいましめ通る水遊び

紙魚食める祖父がのこせし鉋毒史

霧縠互ひの名前呼ぶばかり 千葉 大月玲子

方丈の庭しづもりぬ露万朶

生きてゐる只それだけよ新走り

日帰りで巡りし酒蔵新走り 岡野恵美子

秋冷やとろみスープのモロヘイヤ

産まるるも生くるも奇跡大銀河

二年振り西瓜冷やして子を待ちぬ 喜多恭仁子

まつ黒な種散らし果つ白粉花

震災忌パラリンピックの只中に

献辞ある中古本なり秋の夜 高田みや子

墨含む筆のすべりや涼新た

露けしやアルバムにある生者死者

箸置はガラスのうさぎ夏料理 柳澤道子

雷鳴に震へるガラス梅雨明くる

朝取りの滴をつけて茄子三つ

秋風や雲を浮かべる水溜り

千葉 柳澤道子

背を屈め名はあき月の梨をもぐ

玄関の自転車寂し秋の雨

谷戸の風山法師の実の熟れし頃

酒々井 小林あけみ

雨止みて風の重たき残暑かな

みそ萩や宗吾旧家の土間暗し

炎天や無言劇めく畑の人

佐倉 新谷八郎

木犀の香駅近付けばするマスク

下校の子の大き声行き秋茄子

水口の水澱みけり稲の秋

有泉正夫

バックルは母校の徽章雲の峰

秋の蚊の音をかくして百地蔵

鳥取の辣蕒と聞きまた一つ

杉田富美代

夕暮れのどの木も強く蟬時雨

岐阜提灯明かり点して盆迎ふ

手握るも返せぬ母や晩夏光

鈴木美根子

店の奥ひとり回るは扇風機

片蔭や列をなし行く通学帽

掻き分けて葉蔭にうすき茗荷の花

佐倉 立原千代子

稲刈機地響き立てて刈り進む

新米を搗き了へひよいと担ぎ出し

秋めくや庭の白ばらゆれにけり

米田敏子

今年又蛇の衣の長きこと

白萩やそよぐ風にも人恋し

梅雨明けの草ばうばうの実家かな

船橋 入河 大

さざ波のごとくゆるゆる夏の鴨

オリンピック涼しき月の無観客

ふるさとの空は紺碧飛蝗とぶ

槐島 修

木洩れ日の古き木椅子や揚羽蝶

名月を正面に置き戸を引けり

道の辺の露草あをく空青く

近藤澄子

父母の墓への道の曼珠沙華

八階の窓に小鳥のきてくれし

マスクしてサングラスして注射待ち

山口秀吉

妻病んで三日も続く冷奴

散骨を望みし兄の夏に往く

柏 鹿毛満子

陸橋の秋夕焼や車椅子

溝萩や寺のピアノのこぼれくる

秋日和返事ばかりの長電話

滝の奥みえて飛沫の輝けり

柏

村田由美子

蜘蛛の罫の三日を待たず完成す

長雨の過ぎれば残暑戻りけり

目印は白コスモスの長屋門

松戸

石川幸子

どつと出て又どつと来る葦雀

図書館で五冊借りたり敬老日

風揺らす色とりどりの秋桜

星月夜久闊を叙す人と会ふ

新涼の大地に一歩ふみ出せり

夏の蜂野菜畑に授粉中

桔梗のひらく刹那の音いかに

越し来たる施設の日々よ青みかん

牝鶏の地に蹲る厄日かな

頼家の小さき墓や花すすぎ

百日紅門柱古りし女子寮棟

朝の日に浮雲白し今朝の秋

秋立つや遊具に弾む子らの声

秋の蝶草のあはひに風のまま

朝霧や山の地肌の息深し

市川

奥澤よし江

犬吠の風の合間に虫の声

海風にひかりを放つ薄原

秋場所や新横綱はゆるぎなし

東京

安藤美酒々

太極拳時ゆるやかに昼の虫

ぞろぞろと続く甘藷や蔓長し

空爆を受けし故郷八月十日

杖音にちちろの声の止りたり

友偲ぶニコライ堂の秋深し

みんみんや目白通りの診療所

秋桜また秋桜札所道

人絶えて月美し路地を救急車

草叢にカンナの黄色立ち上がる

送り火やゆつくり燃ゆる藁の牛

雲の峰止まりしままの観覧車

カレーの香換気扇唸り炎昼なる

帰宅するホームの坂は秋夕焼け

納涼祭見得切る役者の眉光る

束ねたる古新聞や秋暑し

枝豆に今日働きし手が伸びる

石塀に色ちりばめて秋桜

石山風童

北口富栄

小池清晴

斉藤孝夫

高野翠子

夏の朝洗車のしぶき虹立てり 東京 田崎京子

猫二匹尻寄せ眠る秋日和

テレワークとぎれとぎれの蟬の声

彫り上げし版画一面秋暑し

東京 平田隆敏

やすらかな最期と知らせ夏行けり

雲の峰崩れくづれて湯殿山

空蟬のつぶされてゐし散歩道

鶴田智美

秋めくや医師より葉半分と

鈴懸の大樹の下に捕虫網

一筋の秋風来る窓辺かな

本多 葵

秋うらら犬三匹の乳母車

昼夜のあはひの青き時に月

天高しすずかけ並木ゆつくりと

戸川節子

木屋の風伴ひて出勤す

チエーンソーの音響きたる残暑かな

鉄橋に始発電車か鳥渡る

松本幸男

秋晴や芝に広がる家族の輪

中澤桃子

朝顔や父と母ゐてつつましく

立ち並ぶビル of 狭間の今日の月

中澤桃子

赤蜻蛉伏すればふゆる明けの原

切れ切れのちちろ鳴く夜や針進む

中澤桃子

辻地藏ゑのころ草に撫でらるる

無造作に瓶に活けられ花芒

西村サカエ

神妙に担架に乗る子震災忌

雨上がり紫陽花の青緑葉に映え

西村サカエ

亡き父の眼鏡を試す秋ともし

茄子の花紫淡く秋色に

西村サカエ

花少し際立つ水辺白芙蓉

三鷹 南場雅子

緑の葉黄色に染めて秋は来ぬ

長谷川はるみ

幾度も灯明母へ盆の夜

空蟬の爪やモップにからみつき

長谷川はるみ

初に会ふ葉先に揺るる蜻蛉かな

ごきかぶり屋外へ猫深追ひす

長谷川はるみ

うす衣河原をおほふ仙人草

府中 竹村晃子

落蟬のじりじり鳴くや腹見せて

長谷川はるみ

目をつぶり檸檬を絞る癖いつも

唐黍も杏も攫ひ雨しとど

平子甲奈

花水木の実五ミリほどの秋気かな

鋸で分かつ萩の根雄々しかり

平子甲奈

入浴後の冷たき麦茶一気飲み

国分寺 中ノあさ子

夏深し古刹のかすかな鐘の音

初蟬に朝の散歩を励まざる

人途絶ゆ路地裏の灯や虫しぐれ

人影のなき普請場の秋時雨

新興住宅空地にそよぐ萩

ゴミ収集車追ひかくる厄日かな

木犀の香や移動図書館走る

虫すだく天声人語声に出し

暑き日にひとつ貰った早生みかん

透かし彫り手鞠のやうな独活の花

二期期はブラバン練習中学校

天高し太き柱の組み上る

雨上り日日に色増す山椒の実

ベッドより窓越しの山粧ひたり

病む姉の米研ぐ記憶大西日

青鷺の群れず動かず水面見る

百日草いつも元氣とおだてられ

山の端の澄みし青空鰯雲

露草や朝日の中に青さ増し

新涼や窓開け放ち朝の卓

国立 阿部幸子

日野 渡辺八枝子

青梅 横井一美

横浜 阿部トキ

大駒 泰子

岡 元枝

さるすべりギランの足は杖頼り

振る杖をかはして舞へり揚羽蝶

黒ぼこの大根畑日は西に

空蟬を乗せて木の葉の揺れるたる

驟雨来て宿る軒なきビルの街

一夏を眺めし瓢箪明日芥

小雨降る軒に迎火一人言

鬼灯の紅を極めて庭灯す

新涼や満月の上星一つ

オリンピックの花火彩るコロナの夜

石塔に名残りの蟬の声限り

夏霧や少女の姿隠しゆく

新涼や大樹に熊手立て掛けし

白樺の幹白々と秋に入る

白萩へ木椅子一つの図書館庭

アイガーの如く湧き立つ雲の峰

目つむればふるさと遠し鬼やんま

送り梅雨おろちの如き土石流

一雨の過ぎてはげしき夜の蟬

長き夜や姉の形見の紬の衣

横浜 岡田幸吉

奥野周光

加藤和子

坂本具子

鈴木律子

長野高朋

三木豊子

盆灯籠遺影ほんのり水色に

大口あけ左へ右へ燕の子横浜豊 美佐子

絵日記の母は黒髪夜の秋

夏の夜の校庭映画「原節子」

スマッシュの汗ちぎれとぶ叫びかな 川崎横山ユキ子

故郷はみな懐かしき草の花

もうこしを食うて老婆の達者かな

闘うて玉虫の翅一つ落つ 鎌倉佐藤千晴

九月の海サーフボードは軒下に

年と名の記入欄あり敬老日

新盆や「まだこれから」と言ひし友 茅ヶ崎久保田富士子

工作を胸高に持ち休暇明

夕映えの川に遡上の鰯の群

西瓜割る四の五の言はず生き抜けよ 伊勢原長嶋和子

追伸に本音託して星月夜

英訳の六法全書夜学生

霽空にへりコプターの残暑かな 本島廣

鳴き急ぐつくつく法師畑仕舞

秋めくや木星土星きらきらと

片蔭へ手招きさるる停留所 山本カツ子

百日紅門扉に影の動かざる

稲の花光る雨粒とどめをり

籠り居はブルーベリーのジャム煮よか 松田古谷悠紀子

富士にのみ雲集まりぬ秋立つ日

けふよりはゴーヤ料理のあれこれを

墓石の陰に群がる曼珠沙華 甲府江口嘉郎

群れなして一番星の帰燕かな

秋の風味噌汁旨し朝の膳

水澄むや箒音立つ社守 静岡大石弘子

雨上り蛸山を膨らます

墳丘を木々の覆へり涼新た

秋日濃し茶の実こぼるる芭蕉句碑 杉澤修

竹林の闇に響けり草雲雀

亀虫の睦みてをりぬ白膠木の実

蔓引くや三つ数ふる烏瓜 杉山紀美子

水音を尖らせ曲がる秋出水

水底に何か蠢き涼新た

秋の蝶地蔵に触るる二度三度 高橋一夫

夏寒し石棺にある盗掘孔

温き香のあたりに残る刈田かな

蝸の鳴くや社の力石

静岡

田中秀幸

川隔てカンナの燃ゆる文殊堂

焼津

小梁洋子

赤蜻蛉富士借景に群れにけり
フロントへ添水の響く旅の宿
フルートの調べ流るる納涼船

筑地裕子

糸瓜忌や寝転びて見る雲の波
長き夜や写生足りぬと師の文字
参道をつくつく法師の声の追ふ

川根本町鈴木裕一

畑の菜を洗ふ中よりちんちろりん
墓掃除終へ山々の暮れにけり

内藤允昭

施餓鬼会の法話の響く大講堂
終戦忌拡声器より若い声

金沢 白村喜久代

蟬の死や空に向かひてひと足掻き
迷路なる向日葵畑の子の叫び

永田公香

敗戦日すぎ母の忌を迎へたり
廃屋にからみ咲きたり凌霄花

北野陽子

夏の日や泡ふつふつと心字池
竹林の音の高きよ秋の空

福田 愛

大花火今かいまかと屋形船
昼下り本読む窓に氷雨打つ

新出祐子

西瓜皮母のせしごと糠漬けへ
片欠けの庚申塔に蛾の擬態

本多ひとみ

夕月夜一人でいても二人かな
があと怒りががと宥める初の鴨

田上ナツ子

鬼の子のゆらりゆらりと無頼なり
山頂の蝶を離さず男郎花

矢野喜久江

松が枝に並びて青の牽牛花
川舟へ勢ひ蟻蛸飛び込めり

夏兆す大海原の照り返し
白磁枕父の遺品の一つなり

嵐去り向日葵畑の立ち上がる
ぬかるみにねまる乳牛秋ぐもり

道場啓子

帆をたたみ終へてヨットの船溜り
ねころびて色なき風をあびにけり

落武者のごと唐黍の立ちつくす

色鳥や外に並び待つべーカリー
夜半の秋何処かに小さき電子音
弱さうな巢立つ燕を見送れり
濁声の鴉なきゆく盆の入り
末枯れたる物に絡みて零余子蔓
地図読めぬ連れと彼方此方秋うらら
吊目あり団栗目あり案山子かな
秋涼や地蔵の前掛け新しき
お造りに青山椒のオイルの香
回覧板秋のてふてふつききたる
水盛り上げ音たつる鯉秋うらら
厄除けの玉蜀黍給ふ観音院
蟬しぐれ魔除けを受くる嫁姑
畝作る最中の夕立あたふたと
朝顔の節目たしかに今朝の風
白峰や鎮守の森は蟬しぐれ
爽涼や樺林朝日存分に
小満や念仏つづく浄土寺
水無月や声太く牛洗はるる
土用波防人の碑をゆすりけり

金沢 廣田宏美

松田好子

宮崎惠美

谷内瑞江

白山 鶴尾正江

敦賀 大田ふじ枝

露座仏の供花にかくれし草雲雀
山小屋にホルンの響き星月夜
攀じのぼり来し岩壁の朝の虹
新洪に染めし帆布の京みやげ
羽根ひろぐ孔雀の午後や乱れ萩
寂庵へ迷ひ道して竹の春
紙魚走る蔵の筆笥の畳紙
落鮎の赤錆色を掬ひけり
農夫等の案山子かかへし棚田みち
夏草の中で鋤振る移民農
夏草を刈りて墓石涼しげに
日に照りて光るボトルの鳥威し
鮎落つる行く手を阻む瀬張網
青蜥蜴背を滑らせて穴に入る
文月や五言絶句の凶みくじ
お中元天地無用の荷が届く
遠ざかる胡弓のひびき風の盆
無住寺にともる一灯烏瓜
墓掃除老いて道のり遠くなり
蜘蛛の子の早し厨に見失ふ

敦賀 川口和代

為永香月枝

中川雅月

中村秀一

中村 優

山本一枝

徳島 林 早苗

パラ五輪みなぎる闘志夏薊

大小の西瓜供へて手を合はす 徳島 山本晴美

ハイビスカス咲きて僧侶を迎へけり

句を添へて残暑見舞に追はれけり

幸せの黄の色まとふ秋の蝶 山本瑤子

水ばかり飲みし一日ヒロシマ忌

寺の闇弥勒菩薩の笑み涼し

靱殻を飛ばす刈田に錆びし鎌 石井 木内マヤ

宵闇やゆつくり回す摩尼車

八方へ星の反乱大花火 田上幸子

かなかなや古寺に歴史の血天井 小松島

棘刺さる残暑の瘦せし雨戸かな

ゲリラ豪雨畠の西瓜割りて去る

からつぽのトランク拭きぬ秋暑し 福岡 相本和子

水たまり烏の歩む野分後

初物の小さき林檎好もしき 石原好宏

快晴のもとで迎へし長崎忌

初めての鳴き声響く法師蟬

近ごろは大雨続き秋初め

冬瓜の小ぶりであれば二つ買ふ 園田清子

数珠玉をむしりむしりてポケットに

鼻を出すマスクの顔や炎天下

畑終へ五体貫く紫蘇ジュース 福岡 鶴田輝代

大夕焼家々昏きシルエット

コロナ禍の機影何処へ秋はじめ

長雨に割れしトマトの縞模様 那珂川 高山ひさ子

秋出水まくら抱へて子の家へ

雨戸繰る音のカロさよ涼新た

文月や龍馬残せし刀疵 長崎 下見直哉

蓮の実の干さるる鴨居撮み食ひ

初秋や小川の風に靡く髪 西海 山下敦子

引き抜きしとまと木匂ふ九月尽

お日様の匂ひの夜具や秋の灯に

彼岸花入日の海は金色に

雨上がり庭の奥より虫の声 札幌 石田 睦

空高し大工仕事の音響く

爽やかやコンピュータの起動音 新座 多田英治

文化の日恵贈句集に涙して

守衛門の向日葵見送る夜勤明け 佐倉 鈴木隆久

夜の秋一灯づつ消ゆ団地の灯

対岸の雲の白さや涼新た 東京 石井登女

橋わたる人影わびし秋の暮

木犀の香り脚止む夕間暮れ 宮崎正義

三日月に明星の夕金木犀

湖守の一日時雨と嘆くかな 松本 藤森利子

蟬絶えて夜明け激しや虫時雨

灸の痕背ナを流せし遠き夏 津 瀬野喜代子

片陰の町に本屋の店仕舞

長机たたまれしまま夜の秋 白山 朝倉みゆき

地上に出で蟬一斉のハーモニ

絵葉書にしるす一言生身魂 敦賀 田嶋豊年

墓洗ふそばに山なす無縁仏

緑蔭の石につまづき風を聴く 徳島 池田やすし

もつれ雲瘡蓋剥す敗戦忌

新入会員のご紹介

阿部 真由美 (東京)

俳句

12月号
予告

11月25日発売

予価950円(本体864円)⑧

特別作品 片山由美子・仁平勝・対馬康子

大特集

「ただごと」と「俳句」の境界

▼総論「ただごと」に詩情が宿るとき……岸本尚毅

▼鑑賞「ただごと」でない名句

▼論考「ただごと」論史

▼実作指南 名手に学ぶ「ただごと」の妙味

特集

必読の俳論1970-2020

▼総論 俳論は羅針盤たりえるか……澤好摩

▼新スタンダード俳論、この一冊

角川俳句賞受賞第一作 岡田由季

句集特集

山本比呂也『生きたしや』

拔井諒一『金色』

●対談 島居真里子×
拔井諒一 ほか

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売! 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

万象作品の佳句

小林 愛子

通過する小さな駅の盆踊り 小板橋泰山

いつも利用している路線であらうか、たまたま初めての線
を走ったのかもしれない。新鮮な目で追っていく。「通過する
小さな駅」に差し掛かった時、盆踊りの姿が見えたが、あれ
よあれよという間に遠ざかってしまった。なにか郷愁を感じ
させる句である。やさしい言葉、無理の無い表現も詩情を醸
し出すのに役立つ。作者は横浜の人。

蜂蜜の固まり始む白露かな 北浦 詩子

蜂蜜は、ミツバチが採取した花により色・風味・粘度が異
なる。固まることがあるが時間や気温に関係あるのだろうか。
今日は暦の上の白露、「陰気ようやく重り、露凝って白き」の
意で秋を三つに分けた仲秋に当たる。底に固まりかけた壺の
蜂蜜を見て、白露という季語に触発されたのか白濁さえも美
しいと感じているのである。作者は札幌の人。

護摩行の果てて迫れり虫の闇 高山 誓英

「護摩とは密教で、護摩壇を設け護摩木を焚いて息災・増益
・降伏・敬愛などを本尊に祈ること…智慧の火で煩惱の薪を

焚くことを象徴するという」と辞書にあった。大変な行であ
ろうと想像される。護摩の炎の後は闇である。掲句の特に
「果てて迫れり」に転換の落差を感じる。俳句での「虫」は
その音を愛でるのが本意であるが、果たして何を受け取った
のであろうか。作者は札幌の人。

荒草の中に燃ゆるは曼珠沙華 長谷川 秀子

「曼珠沙華」は梵語では天上に咲くという花の名であるとい
う。副季語に彼岸花・天蓋花、他に死人花・幽霊花・捨て子
花・したまがりと、まさに天国と地獄であることが面白い。
それだけ人間の生活に深く関わってきた証拠である。この句
の眼目は「荒草」。荒れ地に生えるぞんざいな雑草の中に、ひ
ときわ赤い曼珠沙華に見たものは強さ、哀れさ、可憐さ、は
たまた一筋の光明か。そう思わせるのは、「燃ゆるは」の「は」
の働きである。作者は静岡の人。

透き通る鼓動の浮遊水海月 中谷 由郁

不思議な句だと思った。水海月は辞書に「ミズクラゲ目の
鉢虫類。傘は浅い半球状で直径20センチ。ほとんど無色で4
個の生殖腺は淡褐色か紫色…」とあり、句の「鼓動の浮遊」
とは4個の生殖腺の律動的な運動が傘を透かして見えている
状態をいう。青白い光線のもと水槽に漂う水海月、脳は無く
生殖腺と口と触手だけの、全身を曝け出した生き物を目の前
にして、人はしばし浮世を忘れる。作者は大和の人。

雨の日の雨の音聞く終戦忌 宮田千恵子

一九四五年八月十五日、日本はポツダム宣言受諾して戦争終了。あの日は抜けるような青空だった。七十六年後の今年、作者は雨で迎えた。「雨の音聞く」は一見所在無げな様子だ。戦争を知らない世代であるが、身近な所に犠牲者が在ったとしたら、空を掴む手がかりに虚しさが拡がるであろう。雨のリフレインに心の揺らめきを見る。作者は福岡の人。

盆の僧足袋の疲れてもどりけり 福武幸子

盆の期間中、檀家を持つ寺院の僧侶は檀家を回り、精霊棚の前で棚経僧として供養する。また寺院では施餓鬼会が営まれ、檀信徒は法要に列席し、墓参りの折に僧侶は墓経を上げたりする。句は檀家回りの帰りの僧侶であろう。「足袋の疲れて」と集約したところがよい。真っ白な朝の足袋が鼠色になって戻ったに違いない。作者は芳賀の人。

原爆忌なかなか落ちぬ砂時計 岡田あゆみ

広島市と長崎市に、原子爆弾が投下され今年で七十六年になる。当時を知る人も少なくなり、世の中もすっかり変わった。句の「砂時計」は現代の日常である。砂が落ちたら目の前の美味しいお茶をと、楽しく焦って居る。そうだ今日は「原爆忌」と思い、厳肅な気持ちで体を走った。原爆という非日常性のものが、イベントめいて日常に馴染む。これからいろいろ

いろいろな形で祈りは続くであろう。作者は小松島の人。

炎天にふくむ二粒塩の飴 高野松風

歳時記に次のような文がある。「本来、炎天下と表現すべきを炎天と詠む例は古来少なく、混用を咎める者もない」と知っておいてよいことである。作者は炎天へ出るのに塩飴を口にした。踏ん切りをつける覚悟のようなものが必要だった。熱中症対策といえは理屈になるが昔からの知恵である。二粒というのがおかしい。(炎天へ打って出るべく茶漬飯)川崎展宏。食べ物につながるのが切ない。作者は新潟の人。

月光の僅かにそそぐエスカレーター 桑原優美子

都会を黄昏が静かに包み始めた。ビル、又は駅構内のエスカレーターであろうか。ふっと感じた月のひかり、「僅かにそそぐ」が柔らかい。日常のなかにあって詩を実感する瞬間、現代の月の句である。作者は東京の人。

竿燈のことに美し撓りかな 松浦陵保

竿燈は秋田市に伝わる伝統行事で、ねぶたの形態。太竹に沢山の横竹をつけてそれに俵を見立てた四十八個また四十六個の提灯を提げ、笛・太鼓に合わせて、額・肩で操る。肩の上の太竹が撓うのが「ことに美し」と作者は言う。感嘆とも溜息ともつかぬ声が聞こえるようだ。日本の行事はみな美しくどこか哀れである。作者は千葉の人。

令和元年暮、中国・武漢で発症が確認された新型コロナウイルスは今年も猛威を振るい、1月以降第3波、第4波、第5波と蔓延の拡大が続き、人流に大きな歯止めがかけられた。

1年延期された東京オリンピック・パラリンピックは、ほぼ無観客の中で開催され、日本人の活躍に国中が沸き立った。今年創刊二十周年を迎えた「万象」も記念大会を開催することが出来なかった。東京を始め、各地の句会が開催できないまま、通信句会などで対応を図った。

大会・事業

令和3年の各地の新年俳句大会は、新型コロナウイルスの影響により、中央新年俳句大会（銀座アスターお茶の水資館）は中止。また、各支部の新年俳句大会も中止となったところが多い一方、会員が一堂に会する句会を避け、工夫を凝らして開催された大会があった。北海道支部では、新しい試みとして、投句・選句・選評などに電子メールを利用した。新潟県支部では、事前投句により、内海主宰、小林副主宰、江見編集人ほか、新潟県在住の同人選・選評が行われた。静岡県「季節風」では、自由題に加えて、詠題に「和」を入れた句を投句し、紙上俳句大会を行った。金沢「あかね句会」は、1月7日を予定していたが、コロナ禍と大型寒波襲来予報のため中止となり後日選となった。また、4月に開催予定であった同人総会と10月に予定されていた「創刊二十周年記念『万象』全国俳句大会」も中止となった。

「万象」誌

「万象」誌発行の拠点である都立小松川高等学校同窓会の松葉会館は、昨年から新型コロナウイルス感染防止のため閉鎖されており、編集作業、校正作業は、主に担当者間のファックスや電話、電子メール等を利用して在宅作業で行った。

「万象」誌は、12月号で第20巻、通巻237号となった。内海良太主宰の「続・万象と共に」は60回を数え、「同人作品選」、「同人作品の佳句」は内海主宰。「万象作品選」、「万象作品の佳句」は、2月号から小林愛子副主宰が担当している。連載の、飛高隆夫自選句鑑賞及び福島せいぎ・内藤恵子自選句鑑賞は4月号で終了。

「俳書探訪」は古川京子と曾根満が交替で担当している。俳人協会発行の「俳句カレンダー」の掲載句自註は、山田春生、神田美穂子、福島吉美、中村千久、山本とく江が行った。

「特別作品評」は9月号まで榎本文代、10月号から中條睦子が担当。「万象招待席評」は谷渡末枝が7月号まで担当。「同人作品評」は林陽子が9月号まで、10月号から大林彬彦が担当。

「珈琲ぶれいく」は中村千久が継続担当。

「同人会便り」は4月号まで各地の同人が報告。

「万象ノオト」は会員中心の自由投稿の場として継続。各号に掲載した特集は次の通り。

1月号 内海良太主宰の〈伊勢暦同封されて初便り〉の

色紙と年頭の挨拶。キーワードは、昨年に引き続き「気宇
壮大に志を高く」。副主宰の色紙は「九条葱の香のたつ包丁
始めかな」。新春特別作品は内海保子の「櫛紅葉」15句

2月号 「飛高先生を悼む」 内海良太主宰の弔辞ほか。
編集部抄出による飛高隆夫百句

3月号 令和2年「万象」紙上全国俳句大会特選句一覧。
4月号 新年特集として北海道支部、新潟県支部、静岡

「季節風」、石川「あかね句会」の新年俳句大会記。新同人
9名による競詠作品。

5月号 成瀬真紀子による「新同人競詠作品評」。「万象」
句会一覧。

6月号 広瀬俊雄氏による「芭蕉の句碑めぐり」
7月号 第3回中山純子記念俳句賞受賞作品発表。

8月号 第19回「万象」新人賞発表 小坂橋泰山、木内
マヤ セレクション結社「万象」(「俳句界」2021年5月号よ
り転載)

9月号 句集鑑賞 飛高隆夫『川あかり』喜多尾明子、
大林彬彦。

10月号 創刊二十周年記念号となり、内海良太主宰の色
紙(蘆刈のまた見上げたる蘆の丈)、小林愛子副主宰の(人
影の消えてらんまんたる桜)。河原地英武(伊吹嶺)、田島
和生(雉)、柏原眠雨(きたごち)、暮目良雨(春耕)、辻恵
美子(梅檀)、中川雅雪(風港)、宮田正和(山藺)の各主
宰から二十周年祝句。内海主宰の記念講演要旨「明治の洋
画家 浅井忠のこと」。「万象」創刊二十周年記念俳句賞、

特別賞発表。「万象」全同人の「私の一句」(俳句手帳の掲
載句の自註、俳句と私)。各県の便り「北から南から」

11月号 新同人発表(後述の8名)
12月号 主宰発表「新しい万象を目指して―来年度から
の人事変更について」。「万象」句会一覧。

句集・出版物

2月 福島せいぎエッセイ集『統統狸の燭台』、5月 飛
高隆夫第四句集(遺句集)『川あかり』、浦和句会合同句集

『麦魚』第四句集
受賞

創刊二十周年記念万象俳句賞は、36篇の応募の中から藤
原千代子「茶摘笠」が受賞。佳作は大内マキ子、林陽子。
特別賞は佐藤雄二、今越みち子、佐藤哲が受賞。

第19回「万象」新人賞は小坂橋泰山、木内マヤが受賞。
第3回中山純子記念俳句賞は曾根満。準賞は岡本敬子、
佳作は福島吉美が受賞。

新同人

小坂橋泰山(横浜)、中川雅月(敦賀)、北浦詩子(札幌)、
本多ひとみ(静岡)、桑原優美子(東京)、高野松風(新潟)、
木内マヤ(徳島)、松浦陵保(千葉)

物故同人 謹んでご冥福をお祈りいたします。

山本みゆきさん(2月16日・敦賀) 84歳 大坪あきらさ
ん(元同人) 3月5日 千葉 67歳 木内徹子さん 96歳(4
月22日・東京) 新保ふじ子さん 92歳(6月1日・金沢)
谷田部栄さん 93歳(7月14日・東京) (大木 茂)

同人会だより

第四回中山純子記念俳句賞作品募集

故中山純子先生の功績を顕彰、記念するために企画したものです。毎年一回作品を同人より募り優秀作品を表彰、「万象」同人俳句の向上、発展に資するもので、多数の応募を期待いたします。細目は次の通り。

応募資格 「万象」同人に限る

作品 一人十五句、未発表作品に限る

四百字詰原稿用紙(B4判)とし、冒頭欄外に題名を記入、また末尾欄外に住所、氏名を明記し、一通(コピー可)を提出のこと。封筒に「中山純子記念俳句賞応募」と朱書のこと。

選者 内海良太、小林愛子、福島せいぎ、江見悦子、柳澤宗正、石田野武男、井村和子

締切 令和四年二月十五日(火)

宛先 「万象」石川県支部

〒920-0926 金沢市曉町18-38 中條睦子

入賞発表及び授賞 第十七回「万象」同人会総会(令和四年四月十五日(金)、学士会館〔東京〕を予定)に於いて発表、受賞者には賞状と副賞を贈る。

追記: Eメール応募の場合は左記の二名へ同時発信のこと。

m.chujo@m3.spacelan.ne.jp 中條睦子

makitab2014@gmail.com 成瀬真紀子

なお、第四回は同人会事務局と石川県支部が共同で業務を行います。第五回以降は石川県支部へ業務が移行致します。

珈琲ふれいく

19



今回は格助詞「より」を使った俳句の読み方を勉強します。同じような意味の「から」と比べると文語的な響きがあります。そしてこの「より」には、次に挙げるいくつかの異なる使い方がありますから、それらを確かめておきましょう。

(ア) 時の起点(カラ) (イ) 動作の起点(カラ)

(ウ) 比較の基準(ヨリ) (エ) 経由(ヲ通ッテ)

(オ) 即時(スルヤイナヤ)

次の句に使われている「より」を分類してみましよう。

1 艸の葉を落るより飛ぶ螢かな 松尾芭蕉

草の葉に落ちた螢は、落ちるとすぐに薄みどりの光跡を残して飛び去ったのです。文語表現の「より」です。(オ)

2 玉虫の羽のみどりは推古より 山口青邨

法隆寺の玉虫厨子に思いを馳せた句。この甲虫の美しい緑色は推古天皇の時代から続いているのだなあと。(ア)

3 方丈の大庇より春の蝶 高野素十

京都・竜安寺での作。これはよく分かりますね。(イ)

4 夕焼の雲より駱駝あふれ来つ 加藤楸邨

昭和19年にゴビ砂漠まで遠征した作者。夕焼雲の中から幻影のように現れた駱駝の群を詠んでいます。(エ)

5 雪解田に空より青き空のあり 篠原 梵

雪解田に映る空とその上に広がる空。それぞれの青を比べています。田圃に映る空の青が勝りました。(ウ)

「万象」同人句会報

(9月例会に替えて通信句会) 46名

内海良太主宰選

通過する小さな駅の盆踊り 小板橋泰山
 一遍忌鉦につくつく法師和し 三屋英俊
 路地裏に稲荷の狐秋時雨 大久保進
 秋の風箏目残る宮土俵 横川良子
 新涼の風来て妻の忌なりけり 中村千久
 傾しげたる子規の墓石に秋の蝶 赤松郁代
 とんばうに休憩の杖貸しにけり 古川京子
 揺れるしは綾子の風か青棗 吉中愛子
 富士の水引く外流し花梨の実 江見悦子
 秋湿地地図の折り目に破れかな 横川良子
 手桶下げ母追ふ少年秋彼岸 喜多尾明子
 草相撲ひいきの屋号併せり 草間三香子
 基次郎レモンの月が昇つて 砂地宏子
 ④丹念にまた羽繕ふ羽拔鳥 山本とく江
 「風」歳時記によれば、「一般鳥類は年二回換羽するが、俳
 句では六月から八月にかけて、抜けかわった鳥をいう」とある。
 その姿からみすばらしさや哀れさ、おかしさで詠われる事が
 多い。この句は未だ豊かに羽があるつもり鶏の仕草。
 ⑤人も同じで心当たりがある。

⑥日の丸を掲ぐのみなり在祭 奥 太雅

村里の産土神を祀る神社だろう。老若男女、誰もが楽しみ
 にしている秋祭りもコロナによる二年続きの中止ではやり切
 れない。せめて鳥居の側に大きな日章旗をかかげるのみな
 か。「日の丸」が即物的でいい。モノとして句の中に大きく働
 いている。

小林愛子副主宰選

通過する小さな駅の盆踊り 小板橋泰山
 北斎の墓の藪蚊の縞の濃し 内海保子
 揺れるしは綾子の風か青棗 吉中愛子
 日の丸を掲ぐのみなり在祭 奥 太雅
 溪谷の洞門たどる水の秋 江見悦子
 唇を噛み花道を負け角力 中村千久
 ④新涼の風来て妻の忌なりけり 中村千久
 肌をさらさらと吹き過ぎる新涼の風は、秋になつてほつと
 一息つきながらも、一抹の心細さを覚えるものである。今日
 は妻の忌日、それは新涼の風と共にやつてきた。風に全身を
 まかせたる心地よさ、淋しい中にもなつかしさが一気にこみ
 あげる。

江見悦子選

秋灯下分厚きゲラの記念号 内海良太
 喉越しのなんののかのと走り蕎麦 大久保進
 六尺の病の床の夜長かな 砂地宏子
 虚子翁に会ひに葉月の深大寺 山田春生

秋茄子を漬けて糠床たたきけり 内海保子
秋の海背に磴百段もう百段 古川京子
⑨日表の影なかりけり秋の蝶 内田郁代
中原中也の「一つのメルヘン」を思った。秋の夜、小石ばかりの河原に陽が注ぎ、蝶が石の上に淡くくつきりとした影を落として姿を消す、すると水が流れ始めるといふ幻想的な詩である。掲句は、ひなたをゆく秋の蝶が影をもたないといふ、どこか不可思議な情景。中也の詩を下敷きに、秋の蝶の明るいはかなさを詩情豊かに詠んだ。

吉中愛子選

通過する小さな駅の盆踊り 小板橋泰山
建て替へのなじめぬ生家木槿咲く 柳澤宗正
せせらぎの音ゆるやかに花野行く 岡村純子
大観の筆の勢ひ秋の水 松浦陵保
くちびるにフォスターの歌秋思かな 藤田裕子
秋の海背に磴百段もう百段 古川京子
⑩草も木も風に明けたる子規忌かな 江見悦子
九月の風は涼味を帯び心地良い。草も木も我が身にも、満身を受ける風は新しい。万物の夜明けを思わせる「風に明けたる」は決してオーバーではない。子規の残した偉大なものと思うと。

広瀬俊雄選

一叢の刈残しある棚田かな 丸本祥夫

田んぼアート稔りて楽し行田かな 南雲秀子
切通し地層あらはに虫時雨 下嶽孝一
とんばうに休憩の杖貸しにけり 古川京子
泣き止みし児の手の熱しちちろ鳴く 小板橋泰山
よろよろと指を刺したり秋の蜂 小林愛子
⑪基次郎レモンの月が昇つて 砂地宏子
梶井基次郎の小説「檸檬」を想像した。レモンを月に見立てたのはロマンか、錯覚か？ 今年は仲秋の名月と満月が、八年ぶりに重なるというが、予報では天気は良くないようだ。この句を読んで、さっそく昨夜の待宵月を鑑賞した。

沢辺たけし選

秋の燈に鉛筆文字のやはらかし 佐藤嘉洋
日表の影なかりけり秋の蝶 内田郁代
風向きの変はる雨音草紅葉 山本右近
丹念にまた羽繕ふ羽抜鳥 山本とく江
読みかへす文にかなかなしぐれかな 榎本文代
柿の枝ぼきつと折れし獺祭忌 丸本祥夫
⑫自転車 赤松郁代
「自転車」だけでなく「籠」と具体的に言ったことにより、からんだ「零余子蔓」の高さまでが見えてくる確かな写生句。このところ増えている廃家の荒れた庭に残されているのか、林のようなところに捨てられているのか、長いあいだ放置されたままの錆びついた自転車。現代の日本が生み出した哀し

い景を詠んでいる。

中村 千久 選

木犀の香り重たき一日暮れ 藤田裕子
潮騒や崖の下より菊香る 丸本祥夫
竹箴に笹のかをりの新豆腐 小坂橋泰山
朽ち舟を打つ細波や秋の声 三屋英俊
読みかへす文にかなかなしぐれかな 榎本文代
子規の忌の夜風きれいに吹きにけり 砂地宏子
④喉越しのなんのかんのと走り蕎麦 大久保 進
同じ食べ物にもそれぞれの好みというものがあるが、蕎麦喰いにもそれぞれの好みがある。そば粉の割合、捏ね具合、切り方、茹で加減、そして蕎麦汁の味。それはうるさいものだ。掲句は、新蕎麦を目当てに集まった蕎麦には一言ある連中の屋下がりの様子だろうか。ああでもない、こうでもないと賑やかなことであつたろう。それを「喉越しのなんのかんのと」と軽く往なしたことで、俳諧味のある一句となつた。

下 嶽 孝 一 選

秋澄むや退院の声晴ればれと 加賀葉子
朽ち舟を打つ細波や秋の声 三屋英俊
影ふたつ曲がりて消えぬコスモス野 喜多尾明子
江の島や秋の立木を栗鼠飛び 山崎郁子
秋茄子を漬けて糠床たたきけり 内海保子
月影に虹の色なるちぎれ雲 沢辺たけし

⑤とんばうに休憩の杖貸しにけり 古川京子
蜻蛉が杭の先に止まり、翅を下げて休む光景はよく見かけられる。掲句は作者が茶店かどこかで休んでいる時に蜻蛉が飛んできて、立て掛けて置いた杖の先に止まったというものが飛び去るまで杖をそのままに、蜻蛉に休憩の場を貸し与えた。加賀千代女を思わせる心情の優しさを詠んだ句である。

大久保 進 選

木犀の香り重たき一日暮れ 藤田裕子
秋灯下分厚きゲラの記念号 内海良太
竹箴に笹のかをりの新豆腐 小坂橋泰山
朽ち舟を打つ細波や秋の声 三屋英俊
鉦叩入定塚の辺りより 三屋英俊
鉛筆を削る木の香や今朝の秋 恒川清爾
⑥六尺の病の床の夜長かな 砂地宏子
病床六尺という非日常の空間の中で迎える夜長とは、どんなものだろうか。あれやこれやと独り思いを巡らすにしても、満ち足りた気分にはなれないだろう。「六尺の病の床」とさうりと外形のみを詠み込んでいるが、そこには寂しさと苛立ちの情が伝わってくる。まんじりともせず時間だけが流れていく、そんな夜長が目につかぶ。

喜多尾明子 選

通過する小さな駅の盆踊り 小坂橋泰山
落蟬の翅搏ちて命呼び起こす 沢辺たけし

建て替へのなじめぬ生家木槿咲く 柳澤宗正
 遠目にもモンローに似し案山子かな 内海保子
 秋茄子を漬けて糠床たたきけり 内海保子
 基次郎レモンの月が昇つてゐる 砂地宏子
 ⑧子規の忌の夜風きれいに吹きにけり 砂地宏子
 子規の句「六月を奇麗な風の吹くことよ」——なんの銜い
 もないこの句を私は好きである。子規の忌は九月十九日、夜
 ははつきりと秋らしい涼しさとなる。子規を思いつつ、子規
 に心を通わせ、「夜風きれいに吹きにけり」と素直に詠みくだ
 して好ましい。

▽中央句会 12月例会に替えて通信句会12月10日投句締切
 ▽同人句会 12月例会（通信句会）はありません

万象基金のご報告

（創刊二十周年記念基金を含む）

匿名	一口
匿名	一口
匿名	一口
小松川句会	一口
匿名	一口
匿名	一口
柳澤宗正	二・五口
匿名	五口

（令和3年9月25日～10月2日・受付順・敬称略）

「万象」発展のため、大切に
使わせて頂きます。

万象俳句会

俳句カレンダー掲載句自註

俳人協会発行の今年の「俳句カレンダー」には、万象から五名の方の句が掲載されています。掲載月の万象誌で作者の自註を順次紹介します。

遠富士や渚を走る夕千鳥 山本とく江

「風」終刊の頃、南房総館山湾（鏡ヶ浦）に面した城山公園から洲崎灯台まで一泊吟行をした。

公園は約四〇〇年前の里見氏の居城跡。小高い頂上に館山城が復元され、天守閣には「南総里見八犬伝」などが紹介されている。山麓の日本庭園や万葉の径を巡り海岸へ出て、鏡ヶ浦の海岸を洲崎灯台に近い宿まで、自由に散策した。

随分時を経て記憶は薄れてしまったけれども、夕暮れ近い海は穏やかで、渚には千鳥が群れ、金波の帯の先には夕影の富士山のシルエットがくつきりと浮かんでいた。夕映えの美しい景色に同行四人、しばし砂浜に立ち尽くしたことは印象深く、今も鮮明に思い出に残っている。

句会名	開催日時	会 場	指 導	幹 事	幹事電話番号
静岡大里	第1水・1時	大里生涯学習センター	藤原千代子	藤原千代子	054-286-3719
静岡木曜	第3木・1時半	大里生涯学習センター	大長文昭	大長文昭	054-282-1063
小判草	第1日・9時半	静岡市番町市民センター	小川明美	小川明美	054-283-6233
登呂通信	月1回	(投句・通信)	曾根 満	小川明美	054-283-6233
風の谷	第2金・1時半	北部生涯学習センター	曾根 満	曾根 満	054-286-5078
小 春	第3土・18時半	来・て・こ	曾根 満	曾根 満	054-286-5078
静岡放送俳句講座	最終土・10時	SBS 学院	曾根 満	小川明美	054-283-6233
井川お茶壺	第4金・3時	井川生涯学習交流館	曾根 満	長 島 操	054-260-2058
井川山法師	第4金・3時	井川生涯学習交流館	大村 峰子	望月知恵子	054-260-2149
井川 聖	第4土・7時	南アルプス井川観光会館	海野みち子	宮崎知恵美	054-260-2355
満点会吟行	随時	吟行地	曾根 満	小川明美	054-283-6233
富士花野	最終金・9時半	富士駅北まちづくりセンター	神田美穂子	縣 昌 司	0545-63-5697
富士吟行	随時	吟行地	神田美穂子	当 番 制	0545-78-0591
あ か ね	第1木・1時	四高記念館	井村・谷渡	伊藤・豊田	076-239-2103
白 菊	第4水・1時	西光寺	中條睦子	伊藤美音子	076-239-2103
い づ み	第3月・1時	泉野図書館	田村愛子	田村愛子	076-242-1563
若 草	第1土・1時	中央公民館長町館	田村愛子	田村愛子	076-242-1563
蘭	第3水・1時	泉野図書館	井村和子	豊田高子	076-252-2028
ふ れ あ い	第1,第3水・1時半	コミュニティセンター金ヶ崎	谷渡末枝	谷渡末枝	0767-68-2187
敦 賀	第1,第3金・1時	北公民館	石田野武男	倉谷紫龍	0770-22-1619
萩 の 風	第3木,第4火,第4木・1時	生涯学習センター	田嶋豊年	田嶋豊年	0770-23-6444
ま っ か ぜ	第4火・1時	北公民館	石田野武男	倉谷紫龍	0770-22-1619
徳 島	第4土・2時	万福寺	福島せいぎ	福島吉美	086-625-1500
芙 蓉	第1水・1時	男女共同参画センターアミナス	小林愛子	石原好宏	090-8229-4181
長崎鳴滝	第3日・1時	鳴滝西部公民館	丸本祥夫	永田美知子	095-822-8624
真 南 風	第1土・3時	ふう	前田貴美子	前田貴美子	098-834-7086
ふ う	第4木・7時	ふう	前田貴美子	前田貴美子	098-834-7086

※記載事項に変更のあった場合は、総務の久留島(☎ 080-1297-6113)までご連絡下さい。

句会名	開催日時	会 場	指 導	幹 事	幹事電話番号
う す め	第3月・1時	臼井ニコ会館	内海良太	横川良子	043-487-2625
し お さ い	第4水・1時	船橋市勤労市民センター	内藤恵子	片桐帆一	047-426-4376
都 賀	第2日・1時半	都賀コミュニティセンター	内海良太	高田みや子	090-7011-6144
柏	第2日・1時	アミュゼ柏	山本とく江	内田郁代	047-163-6810
柏 吟 行	隔月曜日不定	吟行地	とく江・郁代	当 番 制	
東京吟行	奇数月	吟行地	山田春生	内藤・南雲	03-5605-8445
東京俳句スクール	第2火・1時半	高井戸地域区民センター	春生・悦子	吉中・藤田	044-986-1667
成増けやき	第2木・1時	板橋区立アクトホール	下 嶽 孝 一	下 嶽 孝 一	090-3540-7471
本 郷	第3水・1時半	文京区男女平等センター	山本右近	桔 梗 純	042-726-0174
杜 の 会	第2水・1時	文京区男女平等センター	内藤恵子	草間三香子	03-3975-5983
花桐吟行	第3土	吟行地	須賀允子	加賀・喜多尾	03-3392-3281
小 松 川	第1日・10時	松葉会館	江見悦子	田崎・長谷川	03-3682-2707
青 の 会	第2土・1時半	木内微子宅	須賀允子	鶴田智美	03-3713-2331
華	第1土・1時	シビル	疋田華子	疋田華子	080-65728439
浜 田 山	第4火・1時	PCH グリーンハウス	江見悦子	久留島規子	03-3331-8585
横 浜	第2日・1時	かながわしプラザ	小林愛子	大久保 進	044-333-1054
横浜洪福寺	第2土・正午	ほどがや地区センター	小林愛子	榎本文代	045-953-4246
保土ヶ谷	第2木・正午	西谷地区センター	小林愛子	山崎郁子	045-371-1866
ひまわり	第4木・1時	小林愛子宅	小林愛子	西本才子	045-311-4140
あ さ ひ	第4火・正午	上白根コミュニティセンター	榎本文代	後藤晴子	045-954-1519
金沢文庫	第3日・1時	谷津坂会館	大橋雅子	加藤和子	045-773-6961
戸塚品濃	第2月・1時	品濃クラブ	恒川清爾	恒川清爾	0467-32-6578
ミ モ ザ	第1木・10時半	榎本文代宅	榎本文代	榎本文代	045-953-4246
川 崎	第1日・1時	教育文化会館	柳澤・新妻	新妻奎子	044-573-9249
伊勢原	第4水・10時	中央公民館	吉中・佐藤和	佐藤和子	0463-93-3979
茅ヶ崎あかしあ	第1火・1時	太陽の郷	三澤治子	久保田富士子	0467-86-5847
静岡青葉	第4日・9時半	大里生涯学習センター	神田美穂子	吉野美智子	054-281-9827
静岡葵	第1日・1時半	大里生涯学習センター	荻野加壽子	石川裕子	054-282-8577

「万象」句会一覧

令和3年12月現在

句会名	開催日時	会 場	指 導	幹 事	幹事電話番号
中 央	第1土・1時	東京文化会館	良太・悦子 ・文代	田中・加賀	043-299-2847
同 人	第4日・1時	俳句文学館	良太・愛子 ・春生	久保村・ 久留島	047-462-3711
札 幌	第1、第3土・1時	道民活動センター	松原智津子	濱谷和代	011-873-7008
札 幌 北	第1、第4日・12時半	篠路コミュニティーセンター	岡本敬子	中鉢弘一	011-600-4411
札幌清風	第3日・11時	札幌真如院	大内和憲	大内マキ子	011-707-2259
札幌円山	第2火・6時	円山商店	松原・濱谷	北浦詩子	090-9085-4391
万象新潟	第1日・1時	新潟市中央公民館	雄二・ひろ	高野・渡辺	070-2828-7962
河 交	第3日・1時	新潟中地区公民館	佐藤雄二	佐藤幸示	025-268-3232
佐 野	第1木・1時半	佐野城山記念館	加藤希代	阿部 澄	0283-23-0747
風 車	第2土・1時	佐野城山記念館	大木 茂	芝宮留美子	0283-25-2155
昂	第3水・1時半	佐野城山記念館	亀田やす子	島田和枝	0283-23-0505
み か も	第3日・1時	関川町公民館	亀田やす子	義本美智子	0283-24-2668
新 樹	第1金・1時半	佐野城山記念館	増田幸子	上岡佳子	0282-62-5138
皐 月	第1月・1時半	城北地区公民館	増田幸子	黒川しげ子	0283-23-9596
すずかけ	第3土・1時	佐野城山記念館	増田幸子	関口かつ子	0283-22-7394
佐野合同吟行	毎月25日	吟行地	亀田やす子	芝宮留美子	0283-25-2155
二 荒	第1木・1時半	宇都宮市中央公民館	阿久津勝利	阿久都登	028-621-5780
芳 賀	第2土・1時半	芳賀町民会館	勝利・かし子	福武幸子	028-678-0175
志木木犀	第2日・1時	柳瀬川図書館	中村千久	板垣陽子	048-465-7217
浦 和	第3日・1時	さいたま市民会館うらわ	中村千久	砂地宏子	0422-47-3402
千 葉	第2土・1時	船橋市勤労市民センター	良太・恵子 とく江・たけし	片桐帆一	047-426-4376
つばき	第1日・1時	船橋市勤労市民センター	内田郁代	久保村淑子	047-462-3711
小金原	第2、第4金・1時半	小金原老人福祉センター	沢辺たけし	野田成夫	047-341-7402
西千葉	第1日・1時	千葉市C.C.松波分室	赤堀洋子	赤堀洋子	047-464-5946
成 田	第1日・1時半	都賀コミュニティーセンター	良太・佐枝・太雅	塗木翠雲	043-312-0849

東 西 南 北

消 息 等

内海良太主宰、小林愛子副主宰の句、
「くぢら」10月号に掲載

虹たてて籠の目白が水浴ぶる 内海良太

花さびた白く咲かんと黄みどりに 小林愛子

副主宰の句を三誌が鑑賞（俳句界）七
月号発表（燕の子）より）

籠り居も長しきふり減多打ち

誰もがこのコロナ籠りに、梅雨時以上の鬱屈感を抱いている。たまりにたまつたうつつとしたものが一瞬破れて、ごきぶりへと向けられたのだ。「減多打ち」にやり場のない思いが溢れている。（「山繭」九月号 松村正之氏）

目の合うて言葉待つ間の涼しさよ

「涼し」という季語は夏の最高の季語であると聞く。上五で目の合うてというからには特定の対象物、つまり人との待ち合わせや人を探す、もしくは偶然にも出会った誰かとの一面面を切り取ったものなのだろう。コロナ禍の中久しぶりに会えた人は退院の家族か、やっと叶った帰省の場面か、それとも恋人同士の待ち合わせなのか、しかし言葉を待っているの

は作者自身である。「涼し」という季語のもたらす感覚が、作者の心の中の風景を読む者にまで感じさせ、句を鑑賞する人それぞれの体験により連想が広がってゆく。感性の立った巧みな句と感じた。

（諷詠）九月号 有本美砂子氏）

恋人同士か、それとも同性の旧友同士か。「涼しさよ」だから随分慣れ親しんで気のおけない間柄なのに分かる。前者ならば雰囲気最高の場面だが、他人から見ればその熱々ぶりにこっちがいたたまれなくなる。句としては後者の、久しぶりに会った旧友同士と思いたい。余りにも沢山話す事があるので、何から話してよいか：目の合うてからの暫くの沈黙が相手への深い懐かしさを表している。お互いに苦労語をして慰め合ったのだろうか。

「目の合うて」から「涼しさよ」へつなげる中七に何とも言えぬ余情があり、こういうシーンを一句に仕上げた力量と感性に脱帽である。（未央）十月号 松田吉士氏）

福島せいぎさんの句、「山繭」九月号で松村正之氏が鑑賞（俳句界）七月号「新作巻頭3句」より）

磯焼けの貝をかざせり鮑海女

海女さんの話によると、今年も磯焼けがひどいとか。ガンガゼの大量発生などで岩場に海藻が少ないのである。これでは鮑も栄螺も育たない。作者は現在の海女さんの生きる姿を描きたいのだ。育ちの悪い貝を手にかざして磯焼けを訴えているのもまた現実の海女の姿なのである。他に「島の子の楽しみなくて泳ぐなり」の句もあり、物事をより深く見ようという意志を感じさせる。

曾根満さんの句（万象）七月号、「鷹」10月号で宮本素子氏が鑑賞

早乙女や水碓さず足は抜く

田植えをしながら進む早乙女の様子が見えてくる。実際に足袋などを履いているかもしれないが、脳裏に浮かぶのは瞬く間に泥水を弾く早乙女の白い素足である。上五の「早乙女や」の打ち出しが快い。藤田湘子「20週俳句入門」に親しんだ鷹衆からすると、中七以降が季語を詠んだ構成なので若干違和感のある「や」の使い方であるが、早乙女という季語を引き立てるうえで十二分に機能している。

（報・江見悦子）

都または市・町・村名

がふなり

年齡

万象作品

四
月
号

(二月十五日締切)
(句の表記は歴史的かなづかいで)

姓 号

年齡

- 71 -

送り先
〒
939
|
0364

射水市南太閤山 13
| 24 成瀬真紀子

新規会員を紹介します

姓 号

郵便番号 〒

住 所

投句者 姓号

住所 〒

電話

あとがき

▽今年最後の「万象」誌をお届けします。コロナ禍に明けたこの年、オリンピック、パラリンピックを挟んで、ようやく下火にはなったものの、依然としてコロナ禍の心配の続く年末となりそうです。

今月号33頁の主筆発表「新しい『万象』を指して」は、万象会議等が開けない中、電話、FAX、メール等を使って意思疎通を図り、決定に至ったものです。来年にはお互いに顔を合わせ

て主宰の言葉を聞けるものと思います。十月号から「同人作品評」の執筆者が大林彬彦さんに代わりました。豊かな詩藻に裏打ちされた、個性全開の鑑賞文を楽しんで下さい。

年の瀬の三日つぎ々晴れわたり 綾子
皆様どうぞ、お健やかに良い年をお迎え下さい。(江見)

▽「彼らの俳句はひと味違う」(帯文)『文豪と俳句』(岸本尚毅・集英社新書)が、近現代の小説家が詠んだ摩訶不思議で奥深い俳句の数々を、詳細に読み

解いています。紅葉、鵬外、漱石、龍之介といった十一人の文豪を組上に乗せたお薦めの一冊です。(千久)

▽疫病の蔓延のため、2年間の外出自粛措置がとられ、多くの行事が中止となりました。来る年は疫病が収まり、俳句会に元の活気が戻るよう祈ります。

▽内海主宰より「万象」の新体制が発表されました。コロナ自粛で経験したことも、今後の誌面作りに活かしていければと思います。(規子)

▽コロナ下中断していた地元佐倉での「古典文学の会」(指導は内海良太主宰)が再開。「徒然草」が終り「更科日記」が始まった。句会も再開。皆、生き返った感じ。(英俊)

▽「万象ノオト」の原稿依頼先を決めるのも中々楽しい作業。住所と名前を参考にあれこれ勝手に想像しながら決めている。送られた原稿を読むのも楽しい。原稿依頼が届いた方も、ぜひ楽しんで書いていただけたらと思う。

(美穂子)

会員を募ります

会員は左記の会費(誌代)を前納していただきます。

一年分 一二,〇〇〇円
半年分 六,〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。郵便振替口座 00230・0・103581

万象俳句会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡願います。

〒284-0015 四街道市千代田1-7-10
塗木翠雲

万象 十二月号

第二十巻 第九号
通巻 第二三七号

令和三年十二月一日発行

主宰 内海良太
発行人 江見悦子
編集人

〒168-00072

東京都杉並区高井戸東一-31-603

万象発行所

☎〇三六三四一五七九六

万象 第二十卷 第九号（通卷三三七号）

平成十四年十一月十三日 第三郵便物認可
令和三年十二月一日発行（毎月一回一日発行）